

既刊の紹介



源流を行く編

『名張川』(2013) 『木津川上流』(2013)
『高時川・余呉湖』(2014) 『桂川・由良川源流』(2014)

おうみの川編

『赤野井湾と流入河川』(2013) 『安曇川』(2015)
『近江八幡水郷・西の湖』(2016)



みやびな川編

『白川』(2010) 『鴨川・明神川』(2012)
『琵琶湖疏水』(2013) 『京の川』(2014)
『高野川』(2015) 『伏見の川・醍醐の川』(2015)

歴史とロマンの川編

『瀬田川・宇治川』(2010) 『保津川・桂川』(2011)
『芥川』(2011) 『猪名川』(2013)
『天野川』(2015) 『安威川・神崎川』(2016)



なにわの川・庶民の川編

『東横堀川・道頓堀川』(2011) 『恩智川・生駒の川』(2012)
『中河内の川』(2013) 『大川と大阪市内河川』(2013)
『寝屋川』(2015)



琵琶湖・淀川 里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～

総集編

琵琶湖・淀川

(Biwako・Yodogawa)

(公財)琵琶湖・淀川水質保全機構
(公社)日本水環境学会関西支部川部会
(一社)近畿建設協会

(公財)琵琶湖・淀川水質保全機構
<企画編集> (公社)日本水環境学会関西支部川部会
(一社)近畿建設協会

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～ <総集編>

琵琶湖・淀川 (Biwako・Yodogawa)

〔発行〕平成28年3月

〔発行者〕公益財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前1-2-15 (大手前センタービル4F)
TEL. 06(6920)3035 FAX. 06(6920)3036
<ホームページ> <http://www.byq.or.jp/>
散策ブックはホームページ上で閲覧することができます

(公財)琵琶湖・淀川水質保全機構では、寄付へのご協力・賛助会員のご入会をお願いしております。戴いた会費・寄付金は、当機構を通じ琵琶湖・淀川流域の水質保全に活かされます。詳しくは、ホームページをご覧ください。



川は、人々の心を癒し、和ませるものである。公益社団法人日本水環境学会関西支部川部会は、2001年9月に近木川で開始して以来その癒しを求めて、水辺環境として河川の持つ3つの役割(治水、利水、環境)に目を向けながら、関西の川を実際に歩いてきた。そして、その河川で技術的行政的な課題は何か、等々の視点から、地域住民やNGO・NPOの皆さんとの交流を深めながら、水質、生物の生息空間、景観、周辺の歴史・文化、住民参加などについて観測評価する活動を続けてきた。その結果は、自然と人間の関わりが深いことをあらためて認識するものとなった。あるいは表現を変えれば、川には必ず人々の生活があるということを感じるものとなった。また、近年提唱されている里山、里海と共に里川という概念に通じるものを感じるものでもある。

そんな中で、2009年公益財団法人琵琶湖・淀川水質保全機構と一般社団法人近畿建設協会から琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携行できるガイドブックを制作する話が持ち込まれ、企画することになった。その後、三者はその目的に合致したガイドブックのイメージ合わせに喧々諤々の10回近い会議を重ねて、第1回発行の「白川」編の完成を見た。出来あがった本は、対象河川の概要

はもとより、流域の見所、名水や滝、湧水、水質や生物、周辺の歴史、その川にまつわる興味深い話などが豊富な写真や地図を用いて解説されてきた。また、コラム欄では、ちょっとしたエピソードや楽しい話、代表的地点の水質を囲み記事で紹介している。その後、第2編発行分からも毎編それぞれ数回の編集会議を開催し、時には川部会調査の上に執筆担当者が追加調査を加え、各々内容の一層の充実を図りながら約6年間都合24編の発行を経て、今回の総集編を迎えることになった。

この総集編は、それらの24編を総集しながらも、あらためて琵琶湖・淀川流域全体を見渡し、個別編には無かった琵琶湖全体を紹介し、これまで含まれなかったいくつかの河川も追加した。その結果、あらためて琵琶湖・淀川流域の楽しさ・良さを浮かび上がらせている。しかし、個々にはいずれも概要となっており、詳しくは各個別編を参照されることをお勧めしたい。そして、本ガイドブックが流域の諸河川に一層親しみを感じ、散策するための一助となることを願う。

(福永 勲)

はじめに	(福永) i	5-3 洛西・乙訓の川	(田口) 27
目次	ii	6. 木津川水系(三重県・奈良県・京都府)	
1. 概要・地図	(古武家) 01	6-1 木津川上流	(山本) 28
2. 琵琶湖・流入河川(滋賀県)		6-2 名張川	(奥野・和田) 29
2-1 琵琶湖	(國松) 06	6-3 木津川中下流	(澤井) 30
2-2 高時川・余呉湖	(駒井・國松) 12	6-4 都祁・柳生の里川	(齋藤) 31
2-3 安曇川	(駒井) 13	7. 寝屋川水系(大阪府)	
2-4 近江八幡水郷・西の湖	(駒井) 14	7-1 寝屋川	(土永・澤井) 32
2-5 赤野井湾と流入河川	(大久保) 15	7-2 恩智川・生駒の川	(土永) 33
2-6 野洲川・日野川・愛知川	(大久保) 16	7-3 中河内の川	(澤井) 34
3. 宇治川水系(滋賀県・京都府)		8. 淀川水系中・下流部 (京都府・大阪府・兵庫県)	
3-1 瀬田川・宇治川	(村岡) 17	8-1 三川合流点	(海老瀬) 35
3-2 大戸川	(國松) 18	8-2 天野川	(海老瀬) 36
3-3 伏見の川・醍醐の川	(澤井) 19	8-3 芥川	(海老瀬) 37
4. 鴨川水系(京都府)		8-4 淀川中流域	(澤井) 38
4-1 鴨川・明神川	(勝矢) 20	8-5 安威川・神崎川	(服部・村岡) 39
4-2 高野川	(勝矢) 21	8-6 猪名川	(服部・奥野・高原) 40
4-3 白川	(古武家) 22	8-7 大川と大阪市内河川	(福永) 41
4-4 琵琶湖疏水	(勝矢) 23	8-8 東横堀川・道頓堀川	(福永) 42
4-5 京の川	(古武家) 24	8-9 十三干潟	(土永) 43
5. 桂川水系(京都府)		あとがき	(服部) 44
5-1 桂川・由良川源流	(海老瀬) 25	執筆者	44
5-2 保津川・桂川	(澤井) 26		

(表紙写真/南湖と雪の比良山系)

1 概要・地図

1. 総集編発行の経緯

本書は「琵琶湖・淀川 里の川をめぐる〜ちよっと大人の散策ブック〜」シリーズの総集編である。

本シリーズは、2010年6月の第1回「白川」を皮切りに発行が始まった。シリーズの企画は、リーフレットの表紙裏の「ねらい」に書かれているように、「琵琶湖・淀川水系の河川を対象に散策時に気軽に携帯できるガイドブックを意図したものである。各リーフレットは5分冊に分けられる。

「1. 源流を行く」には「名張川」「木津川上流」「高時川・余呉湖」「桂川・由良川源流」の4編、「2. おうみの川」には「赤野井湾と流入河川」「安曇川」「近江八幡水郷・西の湖」の3編、「3. みやびな川」には「白川」「鴨川・明神川」「琵琶湖疏水」「京の川」「高野川」「伏見の川・醍醐の川」の6編、「4. 歴史とロマンの川」には「瀬田川・宇治川」「保津川・桂川」「芥川」「猪名川」「天野川」「安威川・神崎川」の6編、「5. なにわの川・庶民の川」には「東横堀川・道頓堀川」「恩智川・生駒の川」「中河内の川」「大川と大阪市内河川」「寝屋川」の5編がそれぞれ含まれる。

この総集編では、リーフレットとして発行された上記の河川の概要を各1ページにまとめた。その並びは分冊の順序ではなく各河川の地形的水系的配置に沿い、

琵琶湖・淀川水系最北部の「2-2高時川・余呉湖」から順に配した。

一方、この総集編には、リーフレットでは扱えなかった河川や湖沼が含まれている。その典型が「2-1 琵琶湖」である。琵琶湖は、関西地域の最も重要な湖である。しかし、これまでに多数の成書やパンフレット類が発行されており、どのように“気軽に携帯できるガイドブック”に編集するか、悩ましい問題であった。しかし、今回総集編をまとめる上で欠かせないと判断した結果、一節を設けて紹介することとした。

その他、「2-6」、「3-2」、「5-3」、「6-4」、「8-8」も初出であるが、その重要性や地域的なバランスも考慮して掲載した。しかし、ダイジェストのみでリーフレットとして発行されていないこれらの河川の場合には、その詳細を知ることができない。これらの河川については別に紹介の機会を作りたい。

2. シリーズ発行の背景

本シリーズ発行の背景には、日本水環境学会関西支部の川部会活動がある。

川部会は1998年に設立され、2001年度より関西を中心とした「川歩き」活動が始まった。この活動は、「河川の持つ治水、利水、環境の各役割の中で、特に水辺環境の役割に焦点を当て、川を水質だけでなく生物、景観、流域の歴史・文化等から再評価すること」を目的とした。

その成果は環境技術学会誌の「関西の川歩き」(2004~2009年まで34回連載)や「続・関西の川歩き」(2012~2014年まで12回連載)として、10年にわたり46回掲載された。これら掲載河川と海外を含むその他の河川を合わせると、川歩きを行った河川は約70河川に及ぶ。

本シリーズではその膨大な資料から琵琶湖・淀川水系に属する諸河川の情報を抽出し、リーフレットの形で編集した。

3. 総集編の概要

総集編はこの第1章を含め目次に示す8章で構成されている。以下に各章の概要を記す。最後に関連地図を掲載した。

●琵琶湖および流入河川

琵琶湖(2-1)は面積670km²を有する日本最大の淡水湖で、北湖と南湖からなり、近畿地方の主要な水資源となっている。国定公園に指定されている琵琶湖には固有種を含め生物が豊富だが、外来魚問題も生じている。一方、琵琶湖の汚染問題には近年改善がみられる。

滋賀-福井県境を源とし、姉川と合流し琵琶湖に流入する高時川(2-2)は、琵琶湖・淀川水系の源流をなす。流域には用水路で有名な高月町がある。琵琶湖北東部の余呉湖は美しい景観をみせる。

花折断層沿いを北上し北湖西岸に流入する安曇川(2-3)は、流入河川中第2の規模を有し、上流域にはブナ林も形成されている。河口近くでは伝統的なアユ

の築漁が受け継がれている。

豊臣秀次の城下町であった近江八幡市は北湖東岸に位置し、八幡堀、西の湖などで水郷(2-4)を形成する。近江商人発祥の地であり、ヴォーリズ設計の近代建築でも有名である。

南湖東岸の内湾である赤野井湾(2-5)は閉鎖性が強く、大規模土木工事の影響もあり水質悪化が大きな問題となっている。南側の烏丸半島には「体感型」で人気の県立琵琶湖博物館がある。

赤野井湾に流入する野洲川(2-6)は県内最大の河川で、水害防止の放水路が建設されている。同じく北湖東岸には日野川、愛知川が流入し、湖東地方の平地部を形成している。

●宇治川水系

瀬田川(3-1)は琵琶湖唯一の流出口であり、宇治川と名前を変えて淀川に流入する。瀬田川には洗堰、宇治川には水力発電所と治水、利水の施設が並ぶ。下流の平等院は世界遺産である。

滋賀、三重、京都の3府県境を源とする大戸川(3-2)は、湖南アルプスを縦貫し瀬田川に流入する。流路は急峻な花崗岩質のため近代防災発祥の地になった。中流には紫香楽宮跡がある。

京都市伏見区の河川(3-3)には、酒処を南流する東高瀬川、濠川などと、山科盆地を流下する山科川、日野川などがあり、歴史の地を流れ宇治川に流入する。

南部にはかつて巨椋池があった。

●鴨川水系

京都市北西部を源とし市中心を南流する鴨川(4-1)は上流を賀茂川と呼ばれ、流域には平安京からの歴史が重層している。賀茂川から上賀茂神社・社家町を流れる小川が明神川である。

滋賀-京都府県境を源とする高野川(4-2)は、平家物語ゆかりの大原の里を流れ下鴨地区で賀茂川と合流し鴨川になる。流域には寂光院、三千院、修学院離宮など著名な建造物が並ぶ。

京都東山北部を源とする小河川の白川(4-3)は、白川砂の供給源である花崗岩質の上流部を流下し、岡崎から祇園花街を通過して鴨川に流入する。最下流部には重要伝統的建造物のお茶屋が並ぶ。

1880年代後半に南湖三保ヶ関から開削された琵琶湖疏水(4-4)は、山科、蹴上を流れ岡崎で鴨川に流入する。その後鴨川東岸を伏見まで開削された。仁王門通に疎水記念館がある。

市内で唯一北流する疏水分線(4-5)、平安京造営に由来する堀川、右京区鳴滝を源とする天神川、嵯峨野の有栖川などは、市内の景観を特徴づける都市河川である。

●桂川水系

京都市広河原を源とする桂川上流(5-1)は上桂川と呼ばれ、流域には維新の歴史を秘めた山国地区がある。源流を

接する由良川流域には、京大の芦生研究林が広がり、美山かやぶきの里もある。

上流域を流下した桂川(5-2)は、亀岡、嵐山を通り京都市南部で宇治川、木津川とともに淀川を形成する。景観美溢れる保津峡の区間は保津川とも呼ばれ、その出口が名勝嵐山の渡月橋である。

桂川が流下する洛西・乙訓地区では、西羽束師川、小畑川、善峰川など(5-3)が右岸に流入する。この地域では大規模ニュータウンが開発されているが、長岡京跡をはじめ歴史遺跡も多い。

●木津川水系

木津川(6-1)は三重県の布引山地を源とし、柘植川を支川とする服部川を合流する。伊賀市を流下後、岩倉峠を経て京都市南部で淀川となる。芭蕉を生んだ伊賀市には伊賀上野城がそびえる。

三重-奈良県境を源とする名張川(6-2)は、古い歴史を持つ上野市を流下後、梅林で有名な月ヶ瀬溪谷を通り木津川に流入する。上流部の支川宇陀川には赤目四十八滝溪谷が形成されている。

木津川中下流(6-3)には、カヌー発祥の地や恭仁京跡や奈良の都への入り口の木津地区がある。土砂流出が多い中流部支川には多くの砂防ダムが築かれ、砂防歴史公園となっている。

木津川中流部には布目川、白砂川、打滝川などが流入し、古代の歴史に彩られた地で都祁・柳生の里川(6-4)を形成す

る。柳生の里には柳生一族ゆかりの家屋・建物跡が残る。

●寝屋川水系

寝屋川(7-1)は交野市星田山を源とし、大阪平野を西流し、京橋口で大川(旧淀川)に流入する。1972年の大東水害後の治水対策でかみそり護岸となったが、近年は親水整備が進んでいる。

生駒山地南端を源とする恩智川(7-2)は、山麓を北流し寝屋川に流入する。流域には古代の遺跡・古墳が多い。生駒山地から恩智川に多くの支川が流入し、河内七谷と呼ばれる。

中河内を流れる川(7-3)には、東部の恩智川以外に中央部の長瀬川、西部の平野川などがある。長瀬川沿いには司馬遼太郎記念館が建つ。

●淀川水系中・下流部

桂川、宇治川、木津川が京都-大阪府境で合流する地点は三川合流点(8-1)と呼ばれる。この地は石清水八幡宮のある男山と天王山の間の山峡である。宇治川-木津川間の背割堤は桜の名所である。

天空の“天の川”に由来する天野川(8-2)は生駒・四條畷の山地を源とし、七夕伝説のある里を流れて淀川に流入する。磐船峡、国内最大級の吊り橋、大阪市立大付属植物園など見所が多い。

高槻市北部を源とする芥川(8-3)は、市内を南流し淀川に流入する。中流部の摂津峡は奇岩に富み戦国城址もある。下

流部の「あくあびあ芥川」では、芥川の生態系に関する展示が行われている。

三川合流点から続く淀川中流域(8-4)には橋が架かっているが、往時には多くの渡して賑わった。左岸沿いに京街道が走り遊郭跡もある。高槻市鶴殿のヨシ原は歴史的価値を持つ景観である。

北摂地域を源とする安威川(8-5)は、茨木市付近から淀川右岸を南西に流れ神崎川に至る。摂津市で淀川河川水を導水した神崎川は、安威川を合流し大阪湾へ流入する。

兵庫県猪名川町の山地を源とする猪名川(8-6)は、川西市を南流し神崎川に流入する。上流には多田銀銅山の史跡、中流には清和源氏ゆかりの多田神社、下流には近松門左衛門の記念館がある。

大阪市内を流れる淀川の下流部は、明治の新淀川開削後「旧淀川」となり大川(8-7)と呼ばれる。大川は堂島川、安治川となり大阪湾に流入する。大川沿いには造幣局など歴史的建造物が集まる。

秀吉が大阪城外堀として開削した東横堀川(8-8)や商都の顔であった道頓堀川(8-8)は、大阪市内河川の典型である。江戸～明治時代の歴史遺産が並ぶ。

淀川河口の汽水域にある十三干潟(8-9)は、底生動物、汽水性植物が豊富で渡り鳥の中継地となっており、大都市にある貴重な自然空間といえる。

(古武家善成)



琵琶湖・淀川水系流域図



京都地域詳細流域図



大阪地域詳細流域図

2 琵琶湖・流入河川

2-1 琵琶湖

1. 琵琶湖とその集水域の地勢

滋賀県のほぼ中央にある琵琶湖は、南北64km、東西の最大23km、面積670km²で、淡路島(593km²)より一回り大きいわが国最大の淡水湖である。近江盆地の盆地底を湖盆としており、琵琶湖大橋が架かっている狭窄部(1.35km)を境にして、北側の主湖盆を**北湖**(618km²)、南側を**南湖**(52km²)と呼んでいる。北湖には北から竹生島、多景島、沖の白石、沖島の4島がある。そのうち沖島にだけ主に漁業を生業とする人々が常住している。一方、南湖には下水処理場を建設するために1982年に埋め立てが完了した人工の島、**帰帆島**がある。

湖が水を集める範囲を集水域と呼んでいる。琵琶湖の集水域は近江盆地の陸域3,174km²で、ほぼ滋賀県の県域になっている。本州を水理的に日本海側と太平洋側に分ける分水嶺は中央分水嶺と呼ばれ、各地で〇〇トレイルなどと名付けられて、登山道やハイキングコースが拓かれている。近畿地方の中央分水嶺は琵琶湖集水域の北縁で、滋賀県と福井県の県境を通っていて、最も日本海側に偏っている。大阪湾に流れ出る**琵琶湖・淀川水系**の源流は中央分水嶺にある**柘の木峠**で、琵琶湖に流入する高時川の源流(「2-2 高時川・余呉湖」参照)でもある。

北湖集水域は北西部を800m級の**野坂**



琵琶湖集水域

山地、北東部を**伊吹山地**、東部を**鈴鹿山脈**、西部を**比良山地**のいずれも1,000～1,300m級の山々に囲まれている。野坂山地と伊吹山地の北部を結ぶ尾根筋が中央分水嶺で、日本海から北西の季節風が直接吹き付けるため、湖北地域はわが国有数の豪雪地帯になっている。年降水量は2,500mmを超え、雪解け水は琵琶湖の重要な水源になっている。また、早くからスキー場が開設され、マキノ、箱館山、国境、びわ湖パレイ、奥伊吹などのスキー場が京阪神から手近なスキー場として賑わっている。

一方、南湖集水域は南部を500～600m級の**信楽・田上山地**(「3-2 大戸川」参照)、西部は比叡山(848m)を主峰とする**比叡山地**に囲まれている。平地の年降水量は1,500mm前後で、瀬戸内海式気候帯の北縁に位置している。湖南地域は京阪神から近く、ベッドタウンとして開発が進んでいる。

2. 琵琶湖の誕生

近江盆地は、地質構造上は西南日本

内帯にあり、丹波-美濃帯に属している。地質層序は1~2億年前に海底に堆積して生成した秩父古生層が基盤で、これを貫くように花崗岩(一部に流紋岩)が各地に露出している。古生層は砂岩・頁岩・チャート・石灰岩などの堆積岩からなっている。ちなみに、琵琶湖集水域の最高峰**伊吹山**(1,377m)の岩体は石灰岩である。東海道新幹線が近畿圏に入る関ヶ原辺りで、西南斜面を大きく削り取られて無残な姿をさらけ出した山体が車窓に飛び込んでくる。1990年代までセメントや消石灰などの原料として石灰岩を切り出した痕で、今も緑化工事が続けられている。石灰岩は大海の海山に発達した珊瑚礁が起源で、伊吹山は太平洋プレートに乗って遙か彼方から運ばれてきた大海の孤島が起源と考えられている。

琵琶湖の前身は約400万年前に起こった地殻変動によって、現在の三重県伊賀上野辺りにできた大山田湖に遡ると考えられている。その後も甲賀や湖東地域では大小の湖沼(阿山湖や甲賀湖、蒲生沼沢地群)が生成・消滅を繰り返し、これらの地域に**古琵琶湖層群**と呼ばれる湖底堆積層を形成した。この頃はまだ鈴鹿山脈は隆起しておらず、現在は西に流れて



伊吹山地と石灰岩を切り出した痕が残る伊吹山

琵琶湖に流入している野洲川(「2-6野洲川・日野川・愛知川」参照)や日野川・愛知川などは、東に流れて伊勢湾に流入している。古琵琶湖層では貝や魚、スギヤマゾウの臼歯やワニの歯の化石、野洲川の河床ではゾウやシカの足跡化石も見つかっている。

100万年ほど前になると近江盆地が沈降し始め、小さな堅田湖が現在の堅田丘陵あたりでできた。40万年前頃から比良山地と比叡山地にそった**花折断層**の活動が活発になって隆起し、東側が沈降して現在の広くて深い琵琶湖が誕生したと考えられている。ちなみに花折断層は活断層で、マグニチュード7規模の地震が想定されている。

一般に、湖は河川から絶えず土砂が流れ込むため徐々に埋まり、数千年から数万年で陸化して消滅するが、希に10万年以上存続している湖があり古代湖と呼ばれる。古代湖は琵琶湖の外にバイカル湖やタンガニーカ湖など世界に20しかない。

3. 固有種と外来生物

古代湖には独自の進化を遂げた生物が棲息しており、固有種と呼んでいる。琵琶湖には約600種の動物と約500種の植物が生存していると言われているが、そのうち魚15種、貝やエビなどの底生動物37種、水草2種、プランクトン7種、合計61種が固有種であると同定されている。主な漁獲魚種はアユ、ニゴロブナ、ホンモロコ、ビワマス、イサザやスジエビ、セタシジ

ミなどで、なかでもアユは全国の河川に放流されて闘争心の強い鮎として釣り人を喜ばせてきた。また、佃煮にした**小鮎の飴炊き**は、ニゴロブナを**熟れ鮎**にした鮎鮎とともに滋賀県を代表する湖魚料理である。近年、淡水魚の消費は下降傾向である。そこで2013年には宍道湖七珍に因んで、固有種(*印)を中心にビワマス*、ニゴロブナ*、ホンモロコ*、イサザ*、ビワヨシノボリ*、ハス、小アユ、スジエビを**琵琶湖八珍**に指定して、湖魚の消費拡大を図っている。なお、湖岸から沖合に伸びた矢のような形をした定置網は**鮎**と呼ばれ、琵琶湖の風物詩の一つになっている。

一方、琵琶湖でも1990年頃からブラックバス(オオクチバス)やブルーギルなどの外来魚が殖え始め、近年は本来の生態系を攪乱し、漁業に被害を与えるほど殖えている。滋賀県は条例を定めて釣った外来魚のリリースを禁止した。その外、釣りスポットになっている湖岸公園などに**外来魚回収ボックス**の設置、漁業組合に対する外来魚捕獲経費の補助などの対策事業を実施している。外来生物の脅威は魚だけではない。1970年代からオオカナ



琵琶湖の鮎

ダモ、コカナダモの大繁殖が続いているし、最近ではボタンウキクサ、ミズヒマワリ、ナガエツルノゲイトウが汀線付近で大繁殖しており、ブラックバスなどと共に特定外来生物に指定されている。

4. 水鳥の楽園

琵琶湖は鳥獣保護区に指定されており、マガモ、カイツブリ、コハクチョウ、オオヒシクイ、オシドリ、カワウなど多くの水鳥の楽園になっている。ラムサール条約の登録湿地でもあり、**湖北野鳥センター**、**高島市新旭水鳥観察センター**などの水鳥・野鳥の観測ステーションが開設されている。ところで1990年代に突然**カワウ**が大繁殖するという異変が起き、一時は4万羽を超えた。カワウは数千羽がコロニーを作って集団営巣して繁殖する。北湖の北には緑豊かな周囲2km、標高197mの花崗岩の急峻な**竹生島**がぽっかり浮かんでおり、夕陽を背にした景観は奥琵琶湖の代表的なカメラスポットになっている。この竹生島がカワウの営巣地の1つにされてしまったのである。

竹生島には彦根港と今津港から毎日定期船が就航しており、島の南側にある船着き場に着く。数件の土産物店を抜けて165段の石段を登ると、724年に聖武天皇の命により行基が建立したと伝えられる**宝厳寺**(西国三十三所三十番札所)があり、さらに奥に進むと420年に雄略天皇の命により建立され、厳島神社と並んで日本三大弁天のひとつに数えられている**竹生島神社**がある。このように竹生島は古

来より人々の信仰の対象であり、弁才天が手に持っている琵琶が琵琶湖の名前の由来と伝えられている。ちなみに、琵琶湖と呼ばれるようになったのは江戸時代以降で、古くは近淡海、淡海の湖、鳩海などと呼ばれていた。

竹生島は現在も多くの参拝者で賑わっているが、夜は無人島になる。カワウはその隙間を狙って島の北側の針葉樹林を占領して営巣・繁殖するようになった。数年経つと、辺りの樹木は糞や営巣によって立ち枯れ、北側からの景観は一変してしまった。また、4万羽にも増えると、採餌によるアユやフナなどの漁業被害も無視できなくなり、県や市が駆除対策に乗り出した。その結果、2010年頃から減り始め、2014年春には約8,400羽(うち竹生島に約4,600羽)にまで減少した。繁殖地も分散して琵琶湖のカワウ問題は、現在は小康状態である。

5. 国定公園琵琶湖

雄大な琵琶湖に展開する多様な水辺景観は、古代から人々に親しまれてきた。室町時代にはかつて中国第1の湖であった洞庭湖(湖南省)に流入する湘江と支流瀟水の情景が描かれた「瀟湘八



奥琵琶湖にひっそり浮かぶ竹生島

景図」(北宋時代成立)になぞらえて、京の都から近く東国・北陸との交通の要として栄えた湖南地域の8カ所の水辺景観が**近江八景**と称され愛でられてきた。

石山秋月、勢多夕照、粟津晴嵐、
矢橋帰帆、三井晩鐘、唐崎夜雨、
堅田落雁、比良暮雪

石山の秋月は、南郷辺りの瀬田川湖畔から**石山寺**を前景にして琵琶湖を遠望した景観で、境内には紫式部が参籠して源氏物語の想を練ったと伝えられる観音堂が見える。堅田の落雁は比叡山や比良山を背景にして海門山満月寺の境内にある**浮御堂**が水鳥が飛び交う芦原に浮かぶ景観、比良の暮雪は湖中に屹立する**白鬚神社**の朱塗りの大鳥居が厳寒の比良山系を際立たせている情景が目につく。白鬚神社は「近江の厳島」とも言われ、全国に祀られている白鬚(白髭・白髯)神社の総本宮になっている。

琵琶湖は1950(昭和25)年に国定公園に指定された。これを契機に琵琶湖全域の景勝地から湖北6景観、湖南2景観が、**琵琶湖八景**に選定された。

〔湖北〕

深緑:竹生島の沈影、暁霧:海津大崎の岩礁、新雪:賤ヶ岳の大観、月明:彦根の古城、春色:安土・八幡の水郷、涼風:雄松崎の白汀

〔湖南〕

煙雨:比叡の樹林、夕陽:瀬田・石山の清流

6. 琵琶湖の水資源・水環境

琵琶湖は275億 m^3 (北湖273億 m^3 、南湖2億 m^3)の水を湛えており、最大水深は104m(北湖の北西部)である。流出河川は瀬田川で、宇治川・淀川を経て大阪湾に流入する(「3-1 瀬田川・宇治川」参照)。流下経路で取水している浄水場の給水人口は滋賀と京阪神に住んでいる約1,400万人で、これだけ多くの人が多かれ少なかれ琵琶湖の恩恵を受けていることになる。琵琶湖が「近畿の水瓶」と呼ばれる所以である。また、琵琶湖は水位と流出水量を1895(明治28)年の大洪水の後に建設された**南郷洗堰**(1905)で操作されているので、大きな自然のダム湖の役割を果たしており、下流の京都・大阪の洪水や渇水の影響を小さくしている。

湖沼や内湾のように水の入れ替わりが遅い閉鎖性水域は一般に、水質汚濁などの人為的影響を受けやすく、また回復に時間がかかる。1960年代中頃から瀬戸内海や東京湾などで赤潮が大規模に発生するようになり、ハマチの養殖漁業に被害が頻発するようになった。霞ヶ浦や諏訪湖では藻類が異常に増殖してアオコが発生し、コイやフナの生け簀漁業に被害を与えた。琵琶湖ではやや遅れて1969年に、琵琶湖を水源とする京都市の水道水に従来のカルキ臭とは異なる異臭味(カビ臭または土臭)がするいわゆる臭い水が発生した。それ以降、臭い水は琵琶湖・淀川を水源とする上水道で頻発するようになり、浄水処理に活性炭が必須



琵琶湖を堰き止める瀬田川南郷洗堰

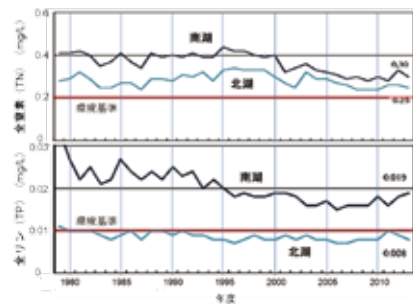
になった。すなわち水質問題はこの頃からイタイタイ病や水俣病などの公害を引き起こした有害物質を含む特定工場の排水による局所的水質汚染から、不特定多数の工場・農業・家庭から排出された窒素・リンによる広域的水質汚濁すなわち富栄養化に移行して行ったのである。

1977年からは琵琶湖に黄色鞭毛藻類ウログレナによる淡水赤潮が大規模に発生するようになった。テレビ報道を通して瀬戸内海で赤潮によって大量のハマチが白い腹を見せて死んで行く映像をしばしば見せられていた滋賀県民の多くが、自らの飲み水の安全に危機感を募らせ、富栄養化防止・合成洗剤追放運動が燎原の火の様に広がった。当時の洗濯用合成洗剤には硬水地域に対応するため、全国一律に富栄養化の原因になるリン酸塩が10%前後も含まれていたからである。県民の運動が県政を動かし、1979年にはリンを含む合成洗剤の販売・使用・贈答を禁止し、工場排水の窒素・リン濃度を国に先駆けて規制する**富栄養化防止条例**が制定されたことは余りにも有名である。条例は1983年に制定された**湖沼法**(湖沼水質保全特別措置法)の魁になった。

1972年には京阪神の水需要に応えるために水位を1.5m下げられるようにして毎秒40m³の新規利水を開発することを目的とした琵琶湖総合開発特別措置法が成立し、**琵琶湖総合開発計画**が実施された。計画には利水・治水と共に水質保全が重点事業に組み込まれ、1980年代半ば頃から公共下水道や農村下水道などの水質保全施設の整備が進み、2010年には滋賀県の下水道等の浄化施設の人口普及率は実質的に100%に達した。しかも、全ての処理施設で富栄養化の原因になる窒素・リンを除去する高度処理が行われており、普通の下水处理施設と較べて窒素は80%、リンは95%以上浄化されている。工場排水についても水質汚濁防止法や条例による排水規制と住民の厳しい監視の目の下で、かつてのような汚水の垂れ流しはなくなった。

このような状況から今後も琵琶湖汚染の原因になる汚濁源は農業排水と大気降下物で、ノンポイント汚染源と呼ばれている。琵琶湖総合開発計画は25年間に約2兆円を投じて1997年に終了したが、2015年には琵琶湖を国民的資産と位置づけ、国が自然環境の再生や保全のための基本方針を策定し、その実現のために財政支援を行うことを明記した**琵琶湖再生法**(琵琶湖の保全及び再生に関する法律)が成立した。

このような汚染と対策の歴史を経て現在の琵琶湖の水質はかなり改善され、水草の過繁茂、難分解性有機物の増加傾



琵琶湖の窒素・リンの平均濃度の推移
 (「滋賀の環境 2014」より筆者改変)

向、外来生物など幾つかの課題は残されているものの、生態系と市民生活に大きな不都合を及ぼすような事象はなくなった。しかし、今後どのような水質に維持することが望ましいのか、また生態系と漁業に望ましい水位操作などについては、議論は進んでいない。さらに、**内湖**の埋め立、護岸などによる湖岸の改変と芦原の減少、流入河川の改修と流入土砂の減少、水田を主とする農地と水利系統の改変、放棄田や里山・植林地の放置などの問題が残されている。2014年にはこれまでの水と環境に関する施策を統括する水循環基本法が制定された。上流の林業から下流の水産業まで関連産業の振興を図りつつ、森林から湖まで連続した水循環系と捉え、生態系の再生・修復・保全に力を注ぎ、それぞれの生活の場で自然豊かで暮らしよい魅力ある生活空間、すなわち人と自然に優しい地域景観を再生・修復していくことが求められている。

(國松孝男)

琵琶湖・流入河川

2-2 高時川・余呉湖

瀬戸内海流域で最大の河川である淀川の源流は、宇治川、瀬田川を遡って琵琶湖に入り、さらに琵琶湖の北東に注ぐ姉川の支流高時川にあるとされている。高時川は、滋賀県最北部の福井県で県境**柗の木峠**(標高539m)に発して**柳ヶ瀬断層**沿いに南流し、琵琶湖に流入する直前で姉川と合流する全長41.4km、流域面積は209km²の一級河川で、上流では丹生川と呼ばれる。柗の木峠近くには**淀川の源の碑**が建っており、「淀川河口から170kmのこの地が源流である」と書かれている。

丹生川沿いには、滋賀の名水に数えられている**己知冷水**や**管並胡桃の自然名水**が湧き出ている。また、高時川支流の杉野川上流の横山岳(1,132m)には**夜這い**の名水、経の滝、**五銚子の滝**があり、ハイカー達を楽しませている。丹生川上流に建設が予定されていた丹生ダムは事実上中止された。また、木之本町には菅原道真公ゆかりの**大箕山菅山寺**があり、ケヤキの大木や**朱雀池**とともにひっそりと佇んでいる。

高月町は、用水路が張り巡らされ湖国百景にも選ばれた美しい里である。江戸時代中期の儒学者で朝鮮との善隣外交に尽力した雨森芳州(1668~1755)を記念する**雨森芳州庵**、観音の里歴史民俗資料館、国宝十一面観音が安置されて



淀川の源流を示す碑

いる渡岸寺観音堂など名所も多く、近くには**名水天皇の水**も湧き出している。町の上流には餅の井堰や馬上井堰などの井堰があったが、現在は高時川頭首工が代わって水を供給している。

高時川と姉川の合流付近の田川は、トンネル**田川カルバート**で姉川をくぐり直接琵琶湖に流入している。姉川河口周辺には湖産アユの産卵用人工河川や湖北町水鳥公園があり、この辺りから見る琵琶湖を前面にして比良山系に落ちる西日は、日本の夕陽100選にも選定されている。

余呉湖は琵琶湖の北東部にあり別名鏡湖とも呼ばれる、周囲6.4km、最大水深13.5m(平均7.4m)の小さな湖である。古琵琶湖から独立したといわれ、完全に閉鎖された自然湖だったが今は導水路と放流水路がある。余呉湖と琵琶湖は、琵琶湖八景の一つである**賤ヶ岳**によって隔られている。湖畔には、日本三大羽衣伝説の天女が羽衣を掛けたとされる**衣掛柳**が残されている。

(駒井幸雄・國松孝男)

2-3 安曇川

安曇川は、京都市左京区北東部の丹波高地東端となる百井峠近くに源流をもつ流域面積311km²、流路延長56kmで、東岸の野洲川に次いで2番目に大きい。百井川が京都府から滋賀県に入ると安曇川となり、**花折断層**沿いに形成されたV字峡谷を北流し、高島市朽木で久多川、針畑川などを合わせて朽木市場を過ぎて向きを大きく東に変え、高島市安曇川町の東部で琵琶湖へと注いでいる。

上流域の久多地区では、高層湿原の**八丁平**や一の瀧、馬尾の瀧、久多の大杉(京都市の天然記念物)をみることができる。

滋賀県の葛川地区には**葛川かや葺きの家**や平安時代初期に開かれた天台修験の道場で現在も「千日回峰行」など厳しい修行が行われている**葛川息障明王院**がある。ここから比良山への道を登ると、「近江水の宝」に選定されている落差20mほどの直瀑で、天台回峰行の最終修行場として神聖視されている**三ノ瀧**に到る。

朽木の針畑川上流となる生杉地区には、**生杉のブナ林**があり、源流部には**トチノキの巨木群**が生育している。

比良山地の最高峰の武奈ヶ岳(1,214m)の麓の畑地区には、標高差100mに積み上げられた359枚もの棚田が美しく日本の棚田百選に選定されている。



安曇川下流から琵琶湖を望む

武奈ヶ岳の北東に端を発する鴨川源流を遡ると日本の滝100選に選ばれている**ハツ淵の滝**に至る。

古くから朽木地域の物資の集散地でこの地域の中心であった朽木市場にある興聖寺境内には、將軍足利義晴に関わる**旧秀隣寺庭園**(別名“足利庭園”)があつて見ることができる。朽木市場を過ぎて近江耶馬溪を経た下流域は、安曇川扇状地・三角州であり、湧き出でる湧水も名高い。高島市新旭町針江地区の**針江の生水**は、平成の名水百選(2008)に選定され、川端と名づけられた井戸は今も107箇所残っている。安曇川右岸には**秋葉の水**が知られている。また、安曇川町上小川の集落内には、日本陽明学の祖と知られる近江聖人中江藤樹(1608～48)の住居・講堂跡の**藤樹書院**があり**三尺の泉**が湧いている。

河口近くでは、「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選定された伝統漁法のアユの築漁が行われ、内湖の**乙女が池**が残っている。湖岸の**白鬚神社**は、対峙する湖中の朱塗りの大鳥居と本殿の鳥居で有名である。

(駒井幸雄)

2-4 近江八幡水郷・西の湖

近江八幡市は、滋賀県中部の琵琶湖東岸に位置し、豊臣秀次が築いた城下町を基礎に発展してきた近江商人の町である。八幡山(標高271m)には**八幡山城跡**があり、近江八幡市街地、安土城跡のある安土山、琵琶湖、**西の湖**や**大中湖干拓地**などが見渡せる。

旧城下町の碁盤目状に整備された通りには、旧西川家住宅など近江商人達の家が保存され、国指定の「近江八幡市八幡伝統的建造物群保存地区」に選定されている。また、米国人ヴォーリズによる旧八幡郵便局や一柳記念館など多くの近代建築作品が遺されている。八幡山麓の**日牟禮八幡宮**では、毎年国の無形文化財である火祭りの左義長まつりと八幡まつりが行われる。西はずれの賀茂神社では、古式に則した競馬行事の足伏走馬の神事が催される。琵琶湖畔の長命寺は西国31番札所である。

近江八幡の水郷は、琵琶湖八景の一つ「春色・安土八幡の水郷」として知られ、国の重要文化的景観第一号(2006)に選ばれている。琵琶湖最大の内湖である西の湖とそれを結ぶ水路では水郷めぐりが楽しめ、3月の「ヨシ焼き」は水郷の早春の風物詩である。西の湖とそこから流れだす長命寺川は、琵琶湖のラムサール条約湿地登録エリアでもある。長命寺川近くの円山地区は日本の里100選に選ば



八幡堀

れており、ヨシズなどの生産がされている。秀次が築いた八幡堀の**八幡堀めぐり**では、近江商人の栄華を示す土蔵群や石垣を見ながらの船旅が楽しめる。

近江八幡市に隣接する能登川町には大中湖干拓地が広がり、その一角に直径13mの巨大な能登川大水車が残されている。伊庭集落内の水路には、バイカモ(梅花藻)や淡水魚のハリヨが生息し、**伊庭の内湖**は滋賀県でも有数の野鳥の観測地である。

八幡山南麓の**大江の湧水**、曳山とイ草の館がある浅小井地区には**あざごいの湧水群**、金剛寺町を通る道路脇には**若宮湧水**や**野田町湧水**、安土の**北川湧水**と**音堂川湧水**、**梅の川**など多くの湧水がある。また、南の瓶割山の北麓には近江八幡唯一の**不二の滝**がある。

万葉集にも登場する**沖島**は、琵琶湖の沖合に浮かぶ国内では唯一淡水湖の中に人が住む小さな島である。島民の多くは漁業関連の仕事についており、琵琶湖特産の鮎ずしなどの湖魚料理が楽しめる。

(駒井幸雄)

2-5 赤野井湾と流入河川

赤野井湾は、琵琶湖南湖の東岸に位置する内湾(面積:1.4km²、水深約2m)である。赤野井湾は琵琶湖の中では比較的水質が悪い水域で、1994年の渇水時には、アオコが大量に発生し問題となった。赤野井湾は地形的に閉鎖性が強いいため、湾内で植物プランクトンが増殖しやすい。それが水質が悪くなる第一の原因である。赤野井湾とその周辺水域では、国・滋賀県によって水質保全対策事業が進められており、その事業の各種事例が豊富にみられる。

赤野井湾集水域とその周辺の土地は、野洲川の沖積作用によってつくられた三角州と扇状地である。赤野井湾周辺の地形は、2つの大規模な土木工事によって大きく変化してきた。一つは、野洲川放水路建設(1971~79)とそれに伴う野洲川北・南流の消滅、もう一つは、木浜地先の埋立工事(1963~71)である。野洲川の流路変更によって赤野井湾集水域の野洲川南流周辺に存在していた多くの湧水が枯渇した。また、赤野井湾北側木浜地先の埋め立てにより赤野井湾の閉鎖性が強まった可能性がある。

流入河川の水質は、集水域における下水道整備などの水質保全対策の推進により改善しているが、赤野井湾の水質は、河川水質のように改善する傾向はみられていない。このような流入河川と湾内の水



琵琶湖大橋(手前)と赤野井湾

質経年変化の乖離現象は閉鎖性水域ではしばしばみられ、底泥からの栄養塩の溶出など内部負荷の影響ではないかと言われている。

赤野井湾南側の烏丸半島にある**滋賀県立琵琶湖博物館**は、「体感型」博物館として人気がある。また烏丸半島には、**草津市立水生植物園みずの森**があり、ハスやスイレンを中心に様々な水生植物が楽しめ、仏教の三大聖樹(ムユウジュ、ボダイジュ、サラソウジュ)も観賞できる。赤野井湾の東方向には、きれいな山型をした**三上山**(432m)がみえる。三上山は俵藤太の「ムカデ退治の伝説」で知られる。

野洲川を上流に進むと**石部頭首工**(1954年建設、02年改修)がある。野洲川では最大規模の頭首工である。建設計画当初は、岩盤に密着させて表流水も伏流水も全量取水するという計画だったが、下流町村から伏流水の一部を流すように強力な請願があり、固定堰の下の暗渠から伏流水の一部を流すことになった。このことは農業用水の取水量が減った反面、伏流水の源流が確保でき下流の農民に安心感を与えたと伝えられている。

(大久保卓也)

2-6 野洲川・日野川・愛知川

野洲川は琵琶湖に流入する河川の中では流路延長(65.3km)、流域面積(387km²)ともに滋賀県内最大の河川である。野洲川はかつては「近江太郎」と呼ばれ、しばしば水害をもたらした暴れ川であった。下流部で天井川になっていたことが主な原因だったが、1979年に**野洲川放水路**が完成してからは、下流部での氾濫被害はみられなくなった。野洲川の源流は、鈴鹿山脈の御在所岳(1,209m)に発し、土山町前野へと流れる。この間に**野洲川ダム**(1951年竣工)と**青土ダム**(1988年竣工)が連続してある。両ダムの間に鮎河という地名があり、昔はこの付近で鮎が捕れたことを物語っている。

土山町頓宮付近で野洲川左岸に田村川が合流している。田村川沿いに国道1号線(旧東海道)が走り三重県に通じている。野洲川をさらに下ると水口町酒人付近で左岸に**杣川**が合流する。杣川沿いにJR草津線が走っている。杣川上流には農業用の**大原ダム**(1962年竣工)がある。杣川合流点の下流は江戸時代には横田川と呼ばれ、「横田川の渡し」は東海道を行く旅人によく知られていた。水口町泉には**横田渡常夜燈**が残っている。

日野川は流路延長46.7km、流域面積213km²で、流域面積で見ると滋賀県内で野洲川、姉川(高時川含む)、安曇川に次ぐ4番目の河川である。水源は、鈴鹿



愛知川(中流から上流を望む)

山脈の綿向山(1,110m)である。上流には農業用の**蔵王ダム**(1990年竣工)と洪水調整と農業用水取水を目的とした**日野川ダム**(1965年竣工)がある。中流には江戸中期から活躍するようになった日野商人の町、日野町がある。中流の蒲生平野で竜王山を水源とする佐久良川と合流する。中流域には雪野山にある**雪野寺跡**等奈良時代初期に創建された寺院跡が多くあり文化財の宝庫となっている。

愛知川は流路延長41.1km、流域面積208km²で、滋賀県内では日野川に次ぐ流域面積の河川である。本流の水源は、鈴鹿山脈の藤原岳(1,120m)である。愛知川上流から三重県に通じる**八風街道**(421号線)は、中世以来、近江商人が利用した交通の要路であった。愛知川上流の蛭谷には、およそ1100年前に文徳天皇の第一皇子の惟仁親王が隠棲したと伝えられ、この地での木地師(ろくろを用いて椀や盆等の木工品を加工、製造する職人)の発祥の元になったと言われている。愛知川上流には**永源寺ダム**(1972年竣工)があり、湖東平野の水田に灌漑用水を供給している。

(大久保卓也)

3 宇治川水系

3-1 瀬田川・宇治川

瀬田川は河川として琵琶湖の唯一の水出口であり、滋賀県から京都府にわたるところで宇治川と名前を変え、この宇治川はやがて大阪平野に至り、木津川、桂川とともに3川が合流して淀川となる。

戦国時代の要衝であった瀬田の唐橋には鳥居川水位観測所があり、琵琶湖の水位を観測して久しい。その右岸に見上げる石山寺は聖武天皇の命で創建され、清水寺、長谷寺と並ぶ霊場として、また紫式部が源氏物語を着想した寺として有名である。境内の月見亭に立てば、眼下に豊かな湖水と豊穡な平野が臨まれる。

その下流に瀬田川洗堰あらいげき(1961)がある。元は南郷洗堰(1905)で、以来琵琶湖の水位を制御し続け、現在は最大毎秒800m³の流量制御で洪水と下流の水源調節を行っている。これらの経緯は近くの水のめぐみ館「アクア琵琶」で学べる。

洗堰の下流左岸から合流する大戸川流域には、明治時代のオランダ人技師デ・レーケの功績による近代砂防の土木遺跡が残る。大戸川の合流後は瀬田の溪谷に入り、川幅が一気に狭まって鹿跳しかとびの奇岩罅穴のある急流地帯となる。この辺り、立木観音などの名所がある。

宇治川と名を変えた辺りから宇治市街地に至る川筋は水力発電の巢と言われ、約11kmに及ぶトンネル水路(1913)の水で発電される宇治発電所、さらに今は



紫式部も見た瀬田川と琵琶湖の遠景(石山寺より)

天ヶ瀬ダムによって水没した志津川ダム発電所の電力は、往時の関西産業界を支えたエネルギー源だった。宇治発電所は健在で、20世紀後半からの天ヶ瀬発電所、喜撰山発電所と合わせ貴重なクリーンエネルギーを産み出している。

宇治は何といても平安時代中期の隆盛を残す平等院(世界遺産)を中心とした数ある寺社・名跡と往年の文化が漂う街で、紫式部に因む源氏物語ミュージアムがある。また宇治茶の産地として銘菓とともに味わうのも楽しいし、鶴飼いでも有名だ。宇治橋(646)は僧、道登の築造と言うが、何度も奈良から京に入る戦軍の通路となり、数々の歴史を刻んできた橋で、後に秀吉が茶の水を汲んだという三の間の張り出しが橋に残っている。またこの上流にある朝霧橋は歴史で有名な塔の島、橘島を通過する橋で、鑑流橋とともに誰もが歩く散策のコースである。

宇治は水に縁が深く、鳳凰堂の阿宇池は宇治川の氾濫湿地であった。古来七名水(桐原水、阿弥陀水、浄土水、高浄水、公文水、百夜水、泉殿)があり、宇治上神社など寺社の境内に散在する。

(村岡浩爾)

宇治川水系

3-2 大戸川

大戸川は河川延長38km、流域面積190km²の一級河川である。滋賀県の南端で三重県・京都府との3府県境が交わる辺りを源流とし、信楽山地(標高400~700m)を北流して信楽町黄瀬で西に流路を変えて大津市に入り、田上山地(同400~600m)を貫流して南郷地先で瀬田川と背割堤で併行しながら合流する。中~上流域は三上・田上・信楽県立自然公園の主要部分を構成している。

田上山地は深層風化の進んだ花崗岩が基岩で、その独特の急峻な地形は湖南アルプスとして知られている。近代砂防発祥の地でもある。弥生時代からたたら製鉄が盛んで大量の薪が消費され、さらに藤原京や平城京の造営、東大寺などの建立に多くの巨木が伐り出された。そのため江戸時代にはすっかり禿げ山になっており、大戸川は斜面崩壊を起こしやすく流入土砂量が多い暴れ川であった。1873(明治6)年に淀川水源砂防法が制定されて近代的砂防工事が始まり、2014年に完了するまで136年の長きにわたって流路安定工や山腹緑化工などが行われた。支流天神川にはデ・レーケが指導して建設された鎧堰堤(砂防堰堤)が当時の石組みのまま現存している。

流域にダムは現存しないが、上田上牧に「大戸川ダム」が計画されており、1999年から県道の付け替え工事が始まった。



瀬田川左岸に合流する大戸川

しかしその後、ダム見直しの気運が高まり、現在ダム本体の建設は“凍結”されている。なお、ダムサイト予定地の傍には1911(明治44)年に旧京都電燈牧発電所として建設された小規模な水路式の関西電力大戸川発電所(最大出力1,600kw)があり、発電所建屋がほぼ当時の煉瓦造りのまま現役保存されている。

中流の黄瀬・牧地区には1926年に聖武天皇が造営した紫香楽宮(742~745)として国の史跡に指定された紫香楽宮跡がある。ところが最近その約2km北の宮町で宮殿と推定される大規模な建物跡が発掘され、年代測定などによりこの遺跡が紫香楽宮であると比定された。宮町遺跡は2005年に紫香楽宮跡に追加指定され、黄瀬・牧遺跡は甲賀寺跡とされた。

「たぬきの置物」で有名な信楽焼は日本六古窯の一つで、国道307号線沿いに瀬戸物屋が軒を連ね、滋賀県立陶芸の森も賑わっている。信楽駅から貴生川駅までの14.7kmを信楽高原鐵道が営業しているが、1991年に黄瀬で乗客・乗員42名が死亡する正面衝突事故を起こした。現場には慰霊碑が建立されている。

(國松孝男)

3-3 伏見の川・醍醐の川

伏見は京都市最南端の区で、宇治を経て奈良に至る大和街道の入り口でもある。伏見と言えば、酒処で有名であるが、酒造りには良質で豊富な地下水が欠かせない。「伏見」の名は「伏水」がその名の由来とも言われる。その代表格は御香宮の御香水であろう。湧水もらいに来る人が今も絶えない。近くには酒造会社が32もあり、水面と酒蔵の取合せが独特の景観を醸し出している。

その伏水の水源となっているのが桃山丘陵で、その北側に稲荷山(233m)がある。桃山丘陵の北端にある大岩山(182m)からは**七瀬川**が西方に流れ出し、**東高瀬川**(長さ約5km)に合流する。そのすぐ西方に**城南宮**があり、その社殿を取り囲むように楽水苑がある。中でも「平安の庭」で催される「曲水の宴」は、平安貴族の雅を彷彿とさせる。さらにその西隣に鳥羽離宮跡がある。

伏見港は淀川の川港である。京都の街中の舟運と言えば高瀬舟が有名であるが、その通路であった高瀬川の流末が伏見港なのである。伏見港にはもうひとつ、**琵琶湖疏水**の末端がつながっている。伏見港と淀川(宇治川)の水位には以前からかなりの落差があり、舟の出入りには閘門を必要とした。今では宇治川の水位が低下したことから、この閘門はその本来の機能を失っているが、最近になって修景



城南宮楽水苑 曲水の宴

工事が施され、モニュメントとしての機能を果たしている。伏見港につながる**濠川**や宇治川派流では、近年の環境復元と町おこしの一環で、十石舟や三十石船も復活し、寺田屋浜や大倉記念館浦などの船着場は観光客で賑わっている。

伏見区とは言っても桃山丘陵の東、すなわち山科盆地の南を流れる主な川は**山科川**(長さ約15km)である。山科川は伏見区醍醐陀羅谷から北流して山科区に入り、四宮川を合流して南下した後、安祥寺川および旧安祥寺川を合流して伏見区に入る。伏見区内では主な支川に**合場川**(長さ約2km)があり、そのさらに支流に**日野川**(長さ約2km)がある。日野の里には**法界寺**、鴨長明方丈石や親鸞聖人誕生院など、長い歴史の香りが漂っている。その北には、世界遺産で知られる**醍醐寺**があり、名水でも知られている。

伏見の南方には、以前、**巨椋池**という広大な池が存在した。昭和の初期に干拓されて、今は農地や宅地になっているが、向島地区や一口地区に往時の面影が残っている。向島北端の宇治川左岸河川敷には広大な**ヨシ原**が広がっている。

(澤井健二)

4-1 鴨川・明神川

鴨川は京都市北西部の棧敷ヶ岳を源とし、下鳥羽付近で桂川と合流する幹線流路延長約33kmの中河川である。上流から出町の高野川との合流点までを賀茂川と書くのが慣例である。明神川は賀茂川を源流として志久呂橋下流の明神井堰から主に取水され、御生川、御手洗川、ならの小川と名を変え、上賀茂神社境内を出ると再び明神川と呼ばれる。

賀茂川に架かる**御蔭橋**を東に渡ると**上賀茂神社**の一の鳥居である。上賀茂神社と下鴨神社は葵祭(賀茂祭)で有名である。境内を流れるならの小川は、藤原家隆の古歌に詠まれている。明神川は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された**社家町**の中を流れる。社家町を東に行くと、**大田神社**があり里神楽(京都市登録無形民俗文化財)で知られている。境内の**大田の沢**は1万年以上前の湖の名残と言われており、カキツバタ群落が有名である。前には2009(平成21)年に**北大路魯山人誕生地石碑**が建立された。

賀茂川に架かる御蔭橋から北大路橋辺りまでは、賀茂川でも景色の美しいところである。堤防には数百年は経ったと思われるケヤキの巨木もあり、また比叡山や大文字山が遠望される。府立植物園の森が見えてくると、左岸は半木の道で枝垂桜が植えられ桜の季節には大勢の人出がある。高野川と合流する出町の三角



北大路橋より鴨川を見る

州に到着すると、**下鴨神社**の緋の森が見えてくる。

丸太町橋の近くに頼山陽の山紫水明処がある。鴨川の向うに広がる東山の眺めを「風景無双」と愛したという。橋の南西角に日本の高等女学校の始まりである**女紅場**の石碑がある。二条大橋を下ると**角倉了以別邸跡**で、鴨川の水を分流した禊川の流れを庭園に取り入れている。この辺りから下流の鴨川西沿いは夏になると料亭の床が出る。取り入れられた水は別邸を遣水として流れた後、木屋町通りの二条から**高瀬川**となって流れ下る。西側は**島津製作所創業記念資料館**、その南側は角倉本邸址で**一之船入**に面している。

御池通り近くの高瀬川の西側に佐久間象山と大村益次郎の遭難碑がある。三条小橋を下ると**瑞泉寺**がある。角倉了以が建立した豊臣秀次の六角塚とそれを取り巻いて家族らの石柱が並んでいる。三条大橋は東海道五十三次の終点で、橋の西南角には弥次さん喜多さんの像がある。鴨川を四条大橋まで歩くと、歌舞伎の元祖である**出雲の阿国像**がある。

(勝矢淳雄)

4-2 高野川

高野川の源流に近い大原の里は隠棲の地でもある。大原盆地を南北につらぬく若狭街道(国道367号線)の西には**寂光院**がある。ここに隠棲した建礼門院徳子は平清盛の娘で高倉天皇の中宮、安徳天皇の生母である。平家物語の大原御幸では後白河法皇が訪ねている。隣接して建礼門院大原西陵があり、**草生川**を挟んで翠黛山中腹には建礼門院に仕えた阿波内侍などの墓がある。大原女の装束は、阿波内侍の作業着姿が原形という。

若狭街道の東には、天台宗の五箇室門跡寺院の**三千院**がある。本堂の往生極楽院(国重文)は東洋の宝石箱とも言われ、堂内の阿弥陀三尊像(国宝)は平安後期の傑作である。**律川**に架かる未明橋を渡ると天台魚山声明の発祥の**勝林院**がある。法然を招き「大原問答」が行われた寺としても有名である。承久の乱で敗れた後鳥羽天皇と順徳天皇の大原陵もある。**呂川**に沿いさらに山道を進むと**音無の滝**に着く。良忍上人の声明の声に和し、滝の音が聞こえなくなることから音無の滝という。

若狭街道を1km下がつて野村別れから東に山に向かうと、山麓に**惟喬親王墓**が一つ淋しくある。25年間を大原に隠棲して没した。

修学院から一乗寺は、叡山三千坊という比叡山山麓一帯に建てられた多くの寺



修学院付近の高野川

があり、紅葉の名所である。地名の修学院もその寺の一つにちなむ。**赤山禅院**は、平安京の表鬼門を守護する方除けの寺であり、また「五十払い」と言う商習慣の発祥の寺と伝えられている。南に接して、**修学院離宮**がある。後水尾天皇が自ら設計・監督して造営した広大は借景式庭園の離宮で、桂離宮と並び称される。南に進むと**音羽川**と交差する。これに架かる上流の**雲母橋**を渡ると比叡山への最短の道(雲母坂)で、京へ強訴する山法師が下った坂である。

曼殊院は天台宗の五箇室門跡寺院で、茶室八窓軒(国重文)などが有名で紅葉の頃には多くの観光客が訪れる。南に突き当たると石川丈山が30年間閑居した**詩仙堂**がある。カーンと余韻を残して響く「鹿威し」で知られている。西に進むと四辻に一乗寺下り松がある。宮本武蔵と吉岡憲法一門の決闘之地という伝説があるが確証はない。近くに一乗寺という地名の由来となった一乗寺趾石碑がある。南に進むと**金福寺**がある。京都の倒幕派の動向を井伊直弼に伝えた村山たかは、ここで出家して晩年を過ごした。

(勝矢淳雄)

4-3 白川

白川は京都東山の北部の谷を源流とし、北白川で京都盆地に入り、岡崎、祇園街を通り鴨川に注ぐ流路長7.3kmの小河川である。淀川水系の3次支川であることから一級河川に分類される。

白川の上流は京都府道・滋賀県道30号線、通称「山中越え」に沿って流れている。この道の峠付近には、かつて高原別荘地として開発され、現在は瀟洒な分譲住宅が並ぶ大津市比叡平が広がる。山中越えの途中には**地獄谷不動院**があり、岸壁に不動明王が刻まれている。山中越えの京都市側起点近くには**八大竜王日天寺**があり、秋の紅葉で有名である。

日天寺から少し下ると白川はU字型に大きくカーブし、そのカーブの内側に白川砂流出対策用の広大な**沈砂池**が設けられている。白川の上流域には花崗岩質が広がり、風化によって生じた石英・長石が主成分の白砂(白川砂)が下流に大量に流出する。白砂流出はこの川の名前の由来にもなっており、沈砂池はその対策のために建設された。

上流域を流下した白川は今出川通の最東端、通称「銀閣寺道」の西田橋で疏水分線と立体交差する。銀閣寺道が東山に出会うところに世界遺産の銀閣寺が立地する。**銀閣寺**は、室町幕府第8代将軍足利義政により1482年に開山された。国宝の銀閣、東求堂や白川砂で形作ら



祇園新橋地区巽橋付近の白川

れた銀沙灘・向月台、回遊式枯山水庭園など見所が多い。

西田橋から岡崎まで疏水分線が併流するが、人工河川である疏水分線は白川とは逆に北流している。この流域には、谷崎潤一郎や経済学者川上肇の墓がある**法然院**、紅葉の名所である**真如堂**、幕末に京都守護職松平容保率いる会津藩の本陣になった**金戒光明寺**などが並ぶ。

下流部の入口となる慶流橋付近は岡崎である。川底はこの付近でも白く、白川砂の流下がわかる。岡崎一帯は平安期に白河上皇が院政を敷いた「白河」の地である。東岸には臨濟宗大本山**南禅寺**が広がり、隣接して野村別邸碧雲荘など**南禅寺界限別荘庭園群**が形成されている。これら回遊式日本庭園の設計は、「植治」と呼ばれる庭師小川治兵衛による。

祇園花街へと至る流路は、水面が近くシダレヤナギの並木が続き、河畔の伝統的建造物群、**知恩院**、**八坂神社**の景観と相まって上質の親水空間が形成されている。最下流部の**祇園新橋地区**にはお茶屋が並び、京都市の重要伝統的建造物保存地区に指定されている。

(古武家善成)

4-4 琵琶湖疏水

琵琶湖疏水^{そすい}は、滋賀県の琵琶湖を水源として京都市に今も水を送り続けている人工の川である。琵琶湖第一疏水は1885(明治18)年から1890(明治23)年までの5年間をかけて、大津の三保ヶ崎から京都の鴨川合流点までの11.1kmが建設された。主に、舟運、水車動力(水力発電に変更)、灌漑などを目的にし、京都の起死回生をかけて、京都府の第3代知事の北垣國道が決断し完成させた。

計画・設計・施工などの全てを日本人の手のみによって完成させた琵琶湖疏水は日本の土木技術の独立宣言であり、明治期における日本の土木技術の到達点であった。1996(平成8)年にインクライン水路閣など12カ所が近代遺産として国の史跡に指定された。工事の主任技師は、工部大学校(現東京大学工学部)を卒業したばかりの田邊朔郎で、疏水工事着工時は弱冠25歳であった。

琵琶湖疏水の山科部分(山科疏水)の最後に長さ9.7mの小さな橋が架かっている。1903(明治36)年に造られた日本で最初の鉄筋コンクリート橋である。南に下がって、地下鉄東西線の御陵駅出入口横に煉瓦工場跡碑がある。疏水に使うレンガのほとんど全てをこの工場で製造した。東に行くと天智天皇山科陵がある。地下鉄蹴上^{けいあげ}駅を出ると、蹴上浄水場がある。蹴上駅を西に進むとインクラインの下



岡崎を流れる琵琶湖疏水

をくぐる**ねじりまんぼ**がある。インクラインの跡は、散策路になっており、舟を載せた台車が形態保存されている。インクライン途中で田邊朔郎が建立した疏水工事で亡くなった人たちの殉職者慰霊碑がある。蹴上の舟溜りには、台車や台車を引っ張り上げた滑車が置かれている。左手の広場には青年技師**田邊朔郎像**がある。

山すそに沿う**疏水分線**は、南禅寺境内の隅でレンガ造りの**水路閣**となって横切る。**南禅寺**は臨済宗南禅寺派の大本山で、三門は日本三大門の一つである。三条通と仁王門通との分かれ目に琵琶湖疏水を利用した**蹴上発電所**がある。日本で最初の商業用水力発電である。インクラインも日本最初の路面電車(京電)も、この電気を使って運行を始めた。

仁王門通北側には、**南禅寺舟溜り**と**琵琶湖疏水記念館**がある。疏水建設にかかわる貴重な資料が展示されている。鴨川近くの**夷川舟溜り**には疏水事業を完成させた第3代京都府知事**北垣國道の像**が建てられ、疏水を見守っている。この水面を利用して、1896(明治29)年に京都で最初の夷川水泳場が始められた。

(勝矢淳雄)

4-5 京の川

疏水分線・堀川・天神川・有栖川

疏水分線は、東京遷都により沈滞した京都を復興させるため、琵琶湖水を導入する目的で計画された琵琶湖疏水の北方分岐路である。市内河川の唯一の北水路として、1890年に紫明通小川まで建設された。現在の流路は賀茂川までの約7kmで、疏水分線、第1疏水分線、第2疏水分線に分けられる。

疏水分岐後の南禅寺境内には、レンガ造り水路橋「**水路閣**」が建ち、レンガの古色が風景になじんでいる。ここから銀閣寺道まで東山山麓の分線沿いには、哲学者西田幾多郎が散策した「**哲学の道**」が整備され、金戒光明寺、法然院などの寺院が並ぶ。第1疏水分線は北白川の閑静な住宅街を北西に流れ、周辺に湯川秀樹記念館、スパニッシュ・ミッション様式の**京大人文科学研究センター**などがある。第2疏水分線の流れは賀茂川まで円弧を描く。始点にある松ヶ崎浄水場の大きな洗浄水槽が目を引く。周辺には大学も多い。

堀川には、水辺環境整備事業により第2分線水が紫明通の水路を通し導水されている。堀川は平安京造営時に東堀川として西堀川とともに開削された。現在は、水路を含み全長約11kmで、堀川通の二条城まで開渠、その後暗渠で鴨川へと南流する。

上流端の西に位置する船岡山は平安京南北軸の朱雀大路の基準点であり、応



一条戻橋付近の堀川

仁の乱時西軍の陣が築かれた。これが「西陣」の由来となった。堀川紫明交差点近くには紫式部・小野篁墓所、約800m下ると西陣織会館がある。

堀川周辺には、北から、広大な境内が広がる**大徳寺**、陰陽師安倍晴明を祀る**清明神社**、茶道の裏千家今日庵・表千家不審庵、徳川幕府の京の拠点**二条城**などが並ぶ。堀川に架かる一条戻橋や土木遺産の**堀川第一橋**も見所である。

右京区鳴滝山中を源流に御室川を支流とする全長約14kmの天神川は、鷹峯から名前の由来となった北野天満宮傍を南下後、西行・南行して桂川に注ぐ。全長約7kmの有栖川は、右京区嵯峨山中を源流に大覚寺付近から嵯峨野を南東に流下し、梅津で桂川に注ぐ。1970年代は強汚濁状態だった両河川の水質も下水整備により良好になった。

天神川中流部には**北野天満宮**のほか**金閣寺**、龍安寺、仁和寺など見所が多い。有栖川流域には**大覚寺**、車折神社^{くるまざき}などがあり、嵯峨野の風雅を楽しむ。

(古武家善成)

5 桂川水系

5-1 桂川・由良川源流

京都市左京区広河原に発し、大山崎町と八幡市で淀川に入る桂川（流域面積1,100km²）の上流域は上桂川、源流域は大堰川という。源流域の見所は、**花脊八榊地区の支川八榊川の山村都市交流の森**、峰床山（標高970m）や**八丁平湿原**への山歩きと山国の歴史である。源流部大悲山口から支川寺谷川の原地町の奥に、北大峯と称される修験道系山岳寺院の**大悲山峰定寺**がある。

源流域下流部の京都市右京区（旧京北町）山国大野地区の**常照皇寺**は、勅使門や二つの天皇陵で格式高い禅宗寺院で、春の枝垂れ桜・九重桜や秋の紅葉が有名である。下流側鳥居地区の延喜式内社**山国神社**と山国隊士を祀る山国護国神社では、“山国さきがけフェスタ”が10月第2日曜日に催される。維新戦争で奮戦した農民兵“山国隊”を記念し、軍楽隊保存会の鼓笛を奏樂する行進が見もので、京都時代祭の先頭を行く維新勤王隊の本籍である。

上桂川は国道162号と交わる周山で弓削川を併せ、**魚ヶ淵の吊り橋**を経て宇津峡に入る。周山から国道477号經由でも**宇津峡公園**入口に至る。宇津峡は天若ダム（関西電力）と天若湖の**日吉ダム**へと続く。日吉ダムは濁水の長期滞留の悩みも抱えるが、2013年の台風18号のピーク流量カットに貢献し、保津川下りの運航



栗尾峠からの大堰川（桂川）の展望

可能日数を増やした。

由良川（流域面積1,880km²）は南丹市（旧美山町）を発し、下流部は宮津市由良と舞鶴市神崎の境界から日本海に出る。由良川を全国的にした事件は、2004年10月20日の台風23号の大出水で、下流の川沿い国道175号での“貸し切りバス水没・立ち往生”である。水没バスの屋根上や立木で救助を待つ乗客がテレビや新聞で報道され、その治水制御で注目を浴びた南丹市美山大野の**大野ダム**があり、最上流部が原生林の芦生地区である。

芦生演習林（現芦生研究林）内に上部ダムを造り、福井県の原子力発電所夜間余剰電力で揚水し、福井県側の下部ダムへ昼間に落とす発電計画が1965年に浮上した。建設反対運動でダム計画は止まり、京都大学が管理する貴重な学術研究の場として維持されている。下流側知井中地区の**美山かやぶきの里**は、日本郵政のテレビコマーシャルで流された茅葺きの里の郵便配達風景に出会える観光名所である。日本の原風景前の由良川は鮎やアマゴ釣りで賑わい、水没橋（沈下橋）を渡ると**美山自然文化村**に至る。

（海老瀬潜一）

桂川水系

5-2 保津川・桂川

桂川は宇治川、木津川とともに、淀川水系を構成する代表的な支流のひとつで、流域面積1,159km²、河川流路延長114kmの一級河川である。桂川には古くから筏流しがあり、上流部の京北から日吉、八木、亀岡を経て、京都の嵯峨嵐山まで、丹波材の出荷が盛んに行われた。

園部から八木、亀岡にかけての中流部では以前多くの農業用井堰があったが、現在そのいくつかは**上桂川統合堰**に統合されている。また、アユモドキをはじめ、多様な生態系が残っており、その保全活動が注目されている。

亀岡から嵐山の間（この間は保津川と呼ばれる）では、江戸時代中期に角倉了以によって開削されたことによって舟運が一層盛んとなり、現在では保津川下りとして観光客を集めている。

保津峡出口に位置する**嵐山**は**渡月橋**をはじめ、風光明媚で知られるとともに、法輪寺、小督塚、琴聴橋、天龍寺、野宮神社、二尊院、落柿舎、常寂光寺、化野念仏寺、**愛宕念仏寺**、清凉寺、大覚寺、直指庵、車折神社など、多くの歴史遺産が集中している。

嵐山から松尾にかけての桂川左岸堤は、「ふし原堤」と呼ばれている。その近くには梅津大社がある。右岸には**松尾大社**とその摂社である月読神社があり、その南には、華嚴寺（鈴虫寺）と西芳寺（苔



桂川左岸より見た渡月橋・嵐山

寺）がある。桂地区には**桂離宮**があり、桂川の堤防に面して桂垣が設置されている。

その下流左岸には**鳥羽水環境保全センター**がある。その下流、羽束師橋の手前で鴨川が合流するが、羽束師橋の左岸側は横大路草津町と呼ばれ、以前草津湊があったところで、橋のたもとには魚市場遺跡碑文がある。

桂川をさらに下ると、京都競馬場で有名な納所・淀地区である。ここには、淀城跡、淀神社、淀川瀬水車旧址、唐人雁木跡、淀小橋旧跡など、史跡も数多い。その下流では左岸から**小畑川**、**小泉川**などの支川が合流する。小泉川には多くの落差工があるが、魚道の設置に多くの工夫がなされている。

桂川下流部にも多くの井堰があり両岸の田畑を潤してきたが、堰の落差のために魚類の遡上が妨げられ、その改良が望まれている。また、日吉ダムの建設によって洪水被害の頻度が減少したものの、なお、亀岡盆地や下流の京都市域においても氾濫の危険があり、引き堤等の治水事業が進行中である。

（澤井健二）

桂川水系

5-3 洛西・乙訓の川

西羽束師川・小畑川・善峰川ほか

桂川右岸の洛西・乙訓地方は、旧石器時代から人々が生活しており、長岡京に都が置かれた時は都市整備が行われたが、廃都後は、田園風景が広がるようになった。秦氏の葛野大堰の開削をはじめ桂川からの用水取水により、用水路が縦横に張り巡らされている。また、氾濫が多発した地域でもあった。

西羽束師川は、桂離宮の近くの上桂を起点とする寺戸川を、農耕の神を祀る倉掛神社付近で引継ぎ、全長3.8kmで桂川まで流下する。洪水対策として「いろは呑龍トンネル」と名付けられた25万t規模の地下貯留施設の整備が進行しており、越流施設が寺戸川で見ることができる。その神官によって開削されたことから羽束師川の命名の元となった**羽束師神社**が下流にある。

小畑川は、老ノ坂から全長約16kmで淀城跡の対岸付近の桂川に合流する。洛西ニュータウン開発時に、流路を直線状にするとともに、落差工や自然に配慮した改良が実施され、中心部に、小畑川中央公園が整備されている。左岸に、**京都市洛西竹林公園**、物集女車塚古墳や中世の物集女城址がある。右岸へ、大原野神社、勝持寺、正法寺、十輪寺、**善峰寺**等がある西山大原野からの小河川を集めた約22km²の流域面積を持つ善峰川が合流する。



小畑川中央公園付近

下流左岸に大極殿、内裏などの**長岡宮の跡**、伝奈良時代創建の向日神社や向日市文化資料館がある。西国街道を横切る**一文橋**は、洪水のたびに流されるため、架設費として通行人から一文を徴収したことから名づけられた。対岸には、この地方で最も古く、ボタンで有名な**乙訓寺**がある。さらに下流には、**長岡天満宮**、勝龍寺、細川ガラシャゆかりの勝龍寺城跡、恵解山古墳、長岡京解明に生涯を捧げた中山修一氏の記念館がある。

その他、**西芳寺川**は、全長2.4kmで苔寺で有名な西芳寺のそばを流れ、桂川用水と立体交差後桂川に流入する。**新川**は、全長4.7kmで阪急電車桂駅付近を起点とし、上久世で桂川に流入する。**七間堀川**は、全長2.1kmで西羽束師川下流付近を起点とし、17,000枚のモジュールを使用した太陽光発電所、京都府洛西浄化センターのそばを通り桂川に流入する。**小泉川**は、全長5.6kmで眼病平癒の謂れの**楊谷寺**付近を源流とし、ホテル専用用水路が設置されている西代公園を通過し、大山崎JCTの下を通り桂川に合流する。

(田口 寛)

6 木津川水系

6-1 木津川上流

木津川・服部川・柘植川

木津川は、三重県伊賀市と津市の境にある布引山地の坂下を源流とし、県道2号線に沿って流下し阿保盆地に出る。川に沿った初瀬街道を下ると阿保宿がある。阿保の北方には古代の水路が発掘された**城之越遺跡**がある。近鉄伊賀神戸駅から北方の左岸近くに**神戸神社**があり、境内には天之真名井と呼ばれる泉がある。右岸には田植えの頃に水路から田に水をくみ上げる**上林の水車群**がある。

川は伊賀市市街地の西側を流れるが、市街地南部の支流の水質が生活排水の影響で他に比べると悪化している。

市内には**伊賀上野城**があり、城内には**芭蕉翁記念館**などがある。城の南側にある**旧崇廣堂**は、日本でも数少ない建物が現存している藩校である。城から西に行った長田橋には、**淀川遡航終点碑**が立っている。

木津川は大雨のたびに洪水をおこし、大きな被害をもたらしたが、これを防ぐための上野遊水事業が行われている。市街地北部と西部の服部川と木津川には、越流堰と水門が設置されている。

服部川は、布引山地の伊賀越峠付近を源流とする。やや流下して国道163号線に出会うあたりに、芭蕉の句を刻んだ**猿蓑塚**がある。163号線を下った平松宿には、**新大仏寺**がある。川北の交差点を左の方に行くと溪谷美で知られる**馬野溪**



岩倉峽と水力発電所水路跡遊歩道

谷がある。さらに下ると平田宿に出るが、その川沿いの**せせらぎ運動公園**には、この地域が約400万年前には古琵琶湖があったことを示すゾウ・ワニの足跡化石(レプリカ)がある。上野盆地に流入する手前が**中ノ瀬**で、その中ごろに中ノ瀬磨崖仏がある。中ノ瀬を出た川は、伊賀市市街地北西部で木津川に流入する。

柘植川は、伊賀市東北部の加太峠付近を源流とする。柘植には、徳川家康ゆかりの**徳永寺**、芭蕉ゆかりの萬壽寺などがある。川が上野盆地に出るあたりに、大和街道の佐那具宿があり、その東に三重県最大規模の**御墓山古墳**がある。名阪国道の南側に、伊賀一ノ宮の**敢国神社**がある。川は、伊賀市の北部で服部川に合流する。

木津川が、上野盆地を出ていくところが**岩倉峽**で、景観では川の中に大小の岩が散在し、両側から山塊が迫って溪谷美をなしているが、水の流れを阻害し、上野盆地に水害をもたらした大きな障害である。その先の鳥ヶ原は、大和街道(奈良街道)の宿場町として栄えたところで観音提寺がある。

(山本 攻)

6-2 名張川

名張川は、淀川水系の木津川に流入する一級河川であり、三重県、奈良県及び京都府に跨る自然豊かな風情を醸し出す。水源は三重と奈良の県境に立地する三峰山(標高1,235m)にあり、多くの渓谷には史跡や森林や滝が点在する。

上流部は支流の宇陀川流域(奈良県)の女人高野と呼ばれる室生寺や森林浴と名水100選に指定された滝とサンショウウオセンターと赤目四十八滝渓谷があり、深山幽谷の鬱蒼とした森や渓谷は奈良時代の役行者による山岳信仰の修験場であった。真言宗の室生寺派に属する大野寺は平安時代に建立されたが、秋と春には、宇陀川沿の自然岸壁に刻まれた弥勒磨崖仏と紅葉や樹齢300年のシダレサクラの観賞で賑わう。

中流部は名張市の中心を流れる。「名張」の地名は、日本書紀に記載されている隠の駅家なばり うまやに由来する。

名張市を通る幹線道路の国道165号線は奈良時代の東海道:伊賀路(初瀬街道)である。積田神社境内に史跡・鏡池があり名張中央公園には夏見廃寺跡がある。この寺は薬師寺(奈良市)の縁起に依れば昌福寺であり、展示館で和歌や伽藍配置等が見聞できる。名張川では、アユ漁が盛んであり、漁師の築漁(やな漁)に因んで「やなせ宿」が復元されアユ釣り客で賑っている。名張郡出身の観阿弥が



名張川中流部

猿楽の一座を結成して実子の世阿弥と共に能楽の基礎を築いた、ふるさと公園には観阿弥顕彰碑があり、公園内の能舞台で薪能が挙行されている。名張駅北側に観阿弥立像があり、名張藤堂家の太鼓門や江戸川乱歩(作家)の生誕記念碑もある。国道165号線を伊賀上野方面に行くと美旗駅の近くに5~6世紀の前方後円墳の馬塚古墳(全長142m)がある。

下流部には梅林で有名な月ヶ瀬渓谷があり梅の資料館や京都府南山城村の高山ダムや奈良時代の寺社に使う材木伐採地であった尾山代遺跡おやみでや山岡宗八(作家)の剣豪物語で有名な柳生の里の家老屋敷にも歴史探訪ができる。

特筆すべきは「洪水防止とダム総合調整」が水資源機構木津川ダム総合管理所によって実施され、名張川水系の青蓮寺ダム・比奈知ダム・室生ダム・高山ダムの放流や貯水がコントロールされ河川の氾濫を未然に防いでいる。名張川と月ヶ瀬渓谷の水質は、2010年の測定では、BOD:2mg/L(名張川下流の家野橋)およびCOD:3mg/L(高山ダム湖の表層)であった。

(奥野年秀・和田安彦)

6-3 木津川中下流

木津川は上流部の三重県から京都府に入ると、南山城村、笠置町、和東町、木津川市、精華町、井出町、京田辺市、城陽市、久御山町を経て、八幡市で宇治川と合流し、淀川となる。

南山城村では左岸から名張川が合流し、その直下流に大河原発電所取水堰堤がある。これよりも下流には堰がなく、淀川水系の中で最も自然の残された河道になっている。JR関西本線大河原駅の近くでは、かわまちづくり整備が進められている。

笠置大橋の周辺は日本の遊びカヌー発祥の地として賑わい、水辺の楽校に指定されている。その下流で合流する和東川の上流部丘陵地は、上質な茶の産地として知られている。

その下流の木津川市加茂地区には、かつて恭仁京が置かれていた。さらに下流の木津地区は奈良の都への入り口にあたり、JR奈良線と関西線が出会う。泉大橋の下流で川筋は北に大きく向きを変え、河幅も広がって、砂州が顕著となる。この砂州とそれによって形成される瀬と渚やたまりが多様な生態系を育むとともに、水質の浄化に寄与しているのである。

木津川中流部の支川からは多くの土砂が流出し、河床は高く天井川を形成している。それらの支川の上流には多くの砂



上津屋橋(ながれ橋)

防ダムが築かれているが、不動川の上流に数多くある石積堰堤は日本で最初に築かれたもので、100年以上経った現在もその姿を残しており、砂防歴史公園となっている。井出町の南谷川はゲンジボタルが生息し、ホタル公園が整備されている。

城陽市南部を流れる青谷川沿いには有名な梅林がある。

京田辺市の木津川河川敷にある堤外民地では、茶の栽培が盛んである。市の中央部を流れる馬坂川には大きな農業用の堰があるが、その堰の上流では毎年桜の季節に船乗り体験のイベントが行われている。その西方には、とんちで有名な一休禅師で知られる一休寺がある。

八幡市の上津屋と久御山町を渡す上津屋橋は、流れ橋と知られ、時代劇の舞台として映画にもよく登場する。しかし、たびたび流される橋桁を回収して復旧するには多額の費用がかかり、その保存が危ぶまれている。

木津川の堤防は砂質で抵抗力が小さいことから破堤の危険性が高く、近年、その補強工事が進められている。

(澤井健二)

6-4 都祁・柳生の里川

布目川・白砂川・打滝川

布目川は奈良県北部の笠置山地を流れる木津川の支流で、源は天理市福住町である。福住町浄土には水の神を祀った氷室神社がある。布目川は下流の萩町で支川**深江川**を合する。深江川は針高原の水を広く集めて都祁村を流れ、途中の**都祁水分神社**付近は大和川の源でもあり、藺生地区が分水嶺となっている。古代、都祁の地には鬮鷄国があったといわれ、都祁水分神社は大和の**水分四社**（都祁・宇陀・吉野・葛城）の一つで大和川と木津川の分岐を司る水の神として崇敬されてきた。神社本殿の左奥には長田王が712年に伊勢齋宮へ行く途中立寄った**山辺の御井**がある。山添村へ入って岩を噛む荒瀬や溪流が続く、その先に**布目ダム湖**が現れる。布目ダムは洪水調節や水道用水確保を目的に（独法）水資源機構が1992年に管理を開始した多目的ダムで、上流側に副ダムを擁している。

白砂川は奈良市長谷町と天理市福住町の境付近を源として奈良県北部を流れ、京都府笠置で木津川の左岸に注ぐ。源流の山中には十三重六角石塔の塔の森がある。南田原町付近には落差工が多く、白砂を溜めている様が見られる。上流の川畔には奈良市指定文化財切り付け地蔵（南田原磨崖仏）があり、支流の**和田川**には天智天皇の皇子、のちの春日宮天皇の田原西陵、下流には、光仁天



大柳生の里を流れる白砂川

おのおのあそん やす まる

皇陵墓や太朝臣安萬侶墓がある。白砂川は田原の里から山中の溪谷を北上して大柳生の里に入り、小盆地の中央を流れる。里の小盆地の入口には夜支布山神社、さらに多聞神社、紫雲山東福寺、南明寺と神社仏閣が続く。南明寺の脇の道を進んだところには柳生宗矩とお藤が馴れ初めた**お藤の井戸**がある。大柳生から国道369号を西に行くと、柳生街道随一の名刹、**円成寺**がある。多宝塔にある国宝、大日如来坐像は運慶作である。白砂川は中流の巨岩連なる深い峡谷を笠置町笠置へと下っていく。

打滝川は奈良市別所町南部を源として高原地帯を流れ、笠置町笠置で白砂川右岸に注ぐ。中流の水間の里は小盆地で、奈良、伊賀、都祁、笠置の要衝である。さらに下ると柳生一族の里がある。柳生宗矩が建てた旧柳生藩陣屋跡、柳生十兵衛が門弟を錬成した正木坂道場、柳生家の菩提寺である**芳徳禅寺**がある。柳生の里を出た打滝川は山道に沿う峡谷を下り、笠置の里に出る。その後、白砂川の右岸に注いでいる。

(齋藤方正)

7-1 寝屋川

寝屋川は、交野市**星田山**（標高278m）に源を発し、寝屋川市、大東市、東大阪市を経て、大阪市京橋口で淀川派川の**大川**（旧淀川）に合流する大阪府下有数の一級河川である。**恩智川**が合流する住道付近からは感潮区間となっている。

かつての寝屋川は、田園地帯を流れるのどかな景観を呈していたようであるが、戦後急速に都市化が進み、特に1972年に谷田川と鍋田川で発生した大東水害以後は、かみそり堤と呼ばれる薄い板状の堤防で川と街が仕切られ、水辺の景観といえば、コンクリートと矢板の他は高い垂直壁に垂らされたツタがわずかに潤いを感じさせるのみとなっていた。

この水害以後、寝屋川の上中流域にはいくつもの調節池や治水緑地が設置され、現在さらに地下河川が整備されつつある。流域の北西部には淀川が流れており、寝屋川市の木屋地先で農業用水が取水され、枚方市、寝屋川市、門真市、守口市の農地を潤した後、支川の**古川**や寝屋川に排水されている。

寝屋川の水質は、急激な都市化・工業化により極端に悪化し、その浄化のために淀川からの農業用水取水地点のすぐ近くから**寝屋川浄化導水路**が掘られ、淀川の水量が多い時には桜木町地先で浄化用水として寝屋川本川へ揚水されている。逆に寝屋川の水量が多く洪水の危険



寝屋川せせらぎ公園

がある時には、この導水路を利用して寝屋川の水を**太間排水機場**へ導き、淀川本川へ排水するようになっている。さらに枚方市にあるなぎさ水みらいセンターの処理水が地下を通って桜木橋地先で寝屋川に放流されるようになり、寝屋川本川の水量が常時確保されるようになった。

この寝屋川で、ここ10年のあいだに一部の区間ではあるが親水整備が進み、市民の憩いの場と生物環境の回復が図られている。その第1は寝屋川市駅前の**寝屋川せせらぎ公園**である。これは、寝屋川市が市制50周年を迎えた2001年に始まった寝屋川再生プランワークショップの議論を経て整備された最初の箇所であり、2005年に完成した。続いて2009年には**幸町公園**の親水整備、2013年には**川勝水辺ひろば**が完成している。大東市の**御領水路**では往時の井路風景が再生されている。門真市の**砂子水路**の桜は、大阪府緑の百選に登録されている。

大阪市鶴見区で古川を合流した寝屋川は、城東区で左岸から**平野川分水路**、右岸から**城北川**を合流し、中央区で第二寝屋川を合流して大川に流出する。

(土永恒彌・澤井健二)

7-2 恩智川・生駒の川

恩智川は、生駒山地南端の**高尾山**の岩崎谷が源流である。一級河川の起点は柏原市大県で、生駒山地西麓を柏原市、八尾市、東大阪市を山麓と平行して北上し、大東市住道で寝屋川本川と合流する延長15.4kmの一級河川である。流量は少ないが降雨時には度々洪水を引き起こした。**池島・福万寺遺跡**からは日本に稲作が伝わって間もない時期に水田に水を取り入れ排除する高度な水利システムが取り入れられていたことがわかった。また、弥生後期から中世にかけての水田跡が重層的に見つかり過去数度の大洪水に見舞われたことが明らかになった。恩智川には3ヶ所の遊水池（恩智川多目的遊水池、恩智川治水緑地）が建設されている。明治初期までは舟運も盛んで、河内木綿や水車産業の製品を寝屋川経由で大坂へ運んだ。

流域は旧石器・縄文時代に遡る居住遺跡が点在し、**心合寺山古墳**を始め古墳群が数多く点在する。副葬品から水の祭祀場を表した**導水施設形埴輪**が出土した。弥生時代から農耕が盛んで奈良時代には条里制が敷かれ、池島地域には今も**条理制遺構**が残っている。

恩智川は付け替え前の旧大和川の諸河川（玉櫛川、長瀬川など）とは独立して山麓に沿って南北に直線的に流下しているため人工の川との説もある。条理地



恩智川と生駒山

割による水田整備で水路、河川改修が行われ、現在のような直線河川になったと考えられる。

生駒山地は大阪府と奈良県の境にあり、北から飯盛山、主峰の生駒山、高安山、信貴山、高尾山を経て大和川に至る山地である。多くの谷、溪があり19の支川が恩智川に流入する。特に生駒山と高安山の間には**河内七谷**（鳴川谷、客坊谷、豊浦谷、**額田谷**、**辻子谷**、日下谷）と呼ばれる溪流がある。西側斜面は傾斜が急で、比較的水量も安定しておりで静寂で静謐な雰囲気が古来から竜神信仰や山岳信仰の拠点として栄え、川沿いには**興法寺**、**枚岡神社**、**長尾山天龍院**等、多くの宗教施設が点在する。また、上田秋成や慈雲尊者等の文人が隠遁する庵に格好であった。さらに、辻子谷、額田谷、豊浦谷では豊富で安定した水量を生かした、生薬、伸線等の**水車産業**が江戸時代から明治の始めまで栄えた。溪流に沿ってハイキングコースが整備されており、四季折々の風景を楽しむことができる。

（土永桓彌）

7-3 中河内の川

中河内を流れる主な川は、東部の生駒山麓の水を集める**恩智川**、中央部を流れる長瀬川、および西部を流れる平野川であるが、長瀬川と平野川は1704年の大和川付け替え以前は、**大和川**および南河内から流れてくる石川や東除川、西除川などの下流部となっていた。現在ではそれらは柏原市築留地先で大和川から樋門を通じて取水されており、特に長瀬川は農業水路の位置づけになっている。

長瀬川は八尾市二俣で**玉串川**を分派し、その中間部から**楠根川**が流れ出す。二俣付近と柏村橋付近から五月橋交差点、山本橋から山本町7丁目付近までの玉串川の両岸には桜の木が植えられている。玉串川と楠根川は八尾市と東大阪市との境付近で第二寝屋川に合流する。東大阪市の北部で**第二寝屋川**と寝屋川に挟まれた鴻池地区には、**鴻池新田会所**が残っており、その周囲には**五箇井路**、**六郷水路**などの井路も残っており、それらは徳庵で**寝屋川**に合流する。

長瀬川には、JR八尾駅そばの安中地区に親水公園が整備されており、そのすぐ近くに**安中新田会所跡**である旧植田家住宅がある。八尾高校内には旧大和川堤防跡の狐山が残されている。長瀬川が東大阪市に入ると**金岡公園**があり、ここにも旧大和川堤防跡の名残である百間堤跡が残っている。東大阪市の長瀬北小学



二俣地点における長瀬川(右)から玉串川(左)への分派
校横には「吉松新田会所跡」の案内板がある。この辺の長瀬川には「いきいき水路事業」によって環境整備がなされ、排水路は暗渠化されて川の中に別の小水路を作り、水生植物が植えられている。その下流部には「帝キネ橋」という名前の橋があるが、ここには東洋一と言われた帝国キネマ長瀬撮影所が1930年まであった。その東方には**司馬遼太郎記念館**がある。長瀬川と第二寝屋川に挟まれたところには川俣水みらいセンターがあり、下流の放出で長瀬川が第二寝屋川に合流する。

柏原市で大和川から取水された**平野川**はすぐに一級河川となり、柏原駅付近で修景整備がなされている。八尾市内で空港放水路、大阪市内に入って大正川を合流した平野川は、平野大橋地点で**平野川分水路**を分派し、今川と駒川を合流した後北流して**鳴野**で第二寝屋川に合流するが、地区によって呼称が変わり、上流から**意川**、**竜華川**、**百済川**などと呼ばれている。

なお、中河内では治水対策として、地下河川と下水道管を一体的に整備する地下のネットワークが作られている。

（澤井健二）

8 淀川水系中・下流部

8-1 三川合流点

桂川(流域面積1,100km²)が西から、木津川(同1,596km²)が東から、宇治川(同4,330km²)に合流する地点を、三川合流点と言う。東南側の**石清水八幡宮**の男山(標高143m)と、西北側は明智光秀と羽柴秀吉の山崎の合戦で有名な天王山(同270m)に挟まれた山峡である。かつての交通の要衝で、現在は右岸側をJRや阪急電車と国道171号が通り、左岸側を京阪電車と府道13号が通る。

三川合流点直上流の木津川と宇治川は2つの御幸橋で横断方向に通行できるが、西側の桂川にも名神高速道路の山崎IC方面へのアクセス道路橋が加わり、両御幸橋も4車線化されている。

桂川と宇治川の間に**京都競馬場**が、宇治川東側に**巨椋池**が存在する。宇治川と木津川に挟まれた巨椋池の変遷は、三川合流との関係が深く、現在の京都市伏見区・宇治市・久御山町に広がる宇治川の遊水池であった。豊臣秀吉が宇治川を**伏見城外堀**にして**伏見港**を設けるため、左岸側に**榎島堤**を築き、巨椋池を分離した。その後、5つの堤で4つの池に分かれ、明治の宇治川の付け替えや干拓で、現在の排水機場のある大水田群が出現して、市街地化も進んだ。宇治川と木津川の間に設けられた洪水時背水対策の長い**背割堤**は、桜の名所でもある。

木津川左岸側の京都府八幡市の男山



桂川(手前)と宇治川

(愛称、八幡山)に鎮座する石清水八幡宮は、三大八幡宮の1つで伊勢神宮とともに二所宗廟の官幣大社である。鴨長明の徒然草に、山麓の下院社殿(頓宮)を本殿(上院社殿)と勘違いした仁和寺老僧の逸話にも登場する。男山の竹林の竹は、エジソンの電球のフィラメントに使用された歴史で有名である。徒歩のほか、山麓の鳥居前の京阪電鉄八幡市駅から男山ケーブルで本殿に登ることができる。

男山南側山麓には弁当風和食の名称ともなり、書院庭園・茶室が公開される**松花堂**がある。男山北東側の山麓には、初めて動力付き飛行機を飛ばした二宮忠八翁創建の**飛行神社**がある。

桂川右岸側の京都府大山崎町の天王山山腹には、三重塔や木造十一面観音菩薩立像のある真言宗**宝積寺**がある。近くの**アサヒビール大山崎山荘美術館**はモネの睡蓮の絵画や陶磁器・染織の展示があり、淀川を見下す庭園の桜や紅葉も美しい。その西側にNHK連続テレビ小説のマッサンとエリーで、霧が立ち、清涼な湧水に恵まれた立地を活かした**サントリ山崎蒸留所**がある。

(海老瀬潜一)

淀川水系中・下流部

8-2 天野川

天空の銀河「天の川」に由来する川は全国に6つあり、淀川本川の天野川(流域面積約51km²)は、奈良県生駒市と大阪市四条畷市に発し、交野市と枚方市を縦貫して淀川左岸に入る。天野川には、七夕伝説にちなんで下流側から鵲橋、天津橋、逢合橋、羽衣橋が架かり、川沿いに天野が原、星の森、星ヶ丘、星田の地名のほか、牛石(**牽牛石**)もある。

京阪電車交野線終点私市駅から西に向かうと天野川に出る。そこは**石積み堰堤100年ダム親水公園**で、対岸は**大阪市立大学理学部附属植物園**がある。園入口の花や園内の外国産樹木見本園は森林浴も楽しめる。天野川を遡ると、「**星の里いわふね**」(交野市立いわふね自然の森スポーツ・文化センター)がある。プラネタリウムがあり、幼児でも砂地の浅瀬に入って川遊びができる。左岸側歩道を上がれば**大阪府民の森ほしだ園地**へと続く。木製の橋や堰のほか、山腹にレストハウスや、見物客も手に汗するクライミングウォール(人工の登はん壁)がある。

ほしだ園地のシンボルは、1997年の竣工で国内最大級の吊り橋「**星のブランコ**」(全長280m、地上50m)がある。さらに登るとやまびこ広場があり、**府民の森くろんど園地**を経て**獅子窟寺**や、天野川の**磐船峡**と磐船神社のほか、星田妙見宮(小松神社)等にも行ける。



天野川・星の里いわふね付近

国道1号枚方から奈良県を経て和歌山県新宮に至る国道168号と天野川が交錯しながら、狭窄部の磐船峡を流下する。狭い峠の頂上直前に、巨岩を御神体とし地表下の岩をくぐり抜ける「胎内めぐり」が体験できる**磐船神社**が鎮座する。

屈曲や急流の「**鮎返し滝**」の上流は、離合困難な急カーブで、豪雨時に天野川が溢れる治水対策と山峡の交通の難所であった。これを一挙に解決し、河川と道路が山中を並行して隧道で抜けた両出口は、珍しいツーショットを呈する。天野川は暗闇の**水路トンネル**から、空に飛び出すのが、天空の川にはなりきれず、滝として落下する。その後、減勢池から旧河道に戻り、左右に大きな蛇行を繰り返して魚返しの滝へと下る。

かつて星祭りの土壇が築かれ、天帝を祀った甘野の地、天野が原、交野が原で、天野川と七夕伝説を結びつけるのが、養蚕・機織り技術の渡来人秦氏の秦者の社の**機物神社**である。その7月7日の七夕祭りは、北極星と妙見菩薩信仰が関係する**星田妙見宮**とともに、交野市の一大イベントである。

(海老瀬潜一)

8-3 芥川

高槻市内を南北に縦貫して淀川右岸に流入する芥川(流域面積54km²)中流部には、桜や紅葉のハイキングコースの**摂津峡**がある。上流部の檜田地区は1958年まで京都府で、府境界を越えて大阪府高槻市となった。その下流側で檜田温泉(鉱泉)のある**高槻森林観光センター**は、宿泊や林間散策ができる。

摂津峡上流田園地帯の原地区は、NHK時代劇「銀二貫」にもある、冬季の低温・乾燥条件を利用した寒天作りの場であった。現在は、どぶろく祭りが催される。

原地区の府道6号東側には毘沙門天(重文)等を擁する**神峰山寺**があり、さらに東海道自然歩道の山中を登ると**本山寺**を経てポンポン山や水無瀬川最上流部の川久保に至る。摂津峡入口の上の口までの比較的緩やかな芥川は、流水区間を石やレキの河床材料で8m前後に区切った浅いプール状の魚釣り場と化す。芥川漁業協同組合がマス・アマゴを養魚場で育てて放流するフライフィッシングや、夏季の鮎釣りの場となる。

摂津峡へのアクセスでは、JR高槻駅から市バス上の口バス停で坂道を下り、摂津峡を下の口(塚脇大橋)に出るコースがある。摂津峡では、夫婦岩・八畳岩・屏風岩・行者岩・立岩等の奇岩に富んだ溪谷美が展開される。摂津峡右岸側途中の支流を80mほど登ると、高さ約15mの**白**



こいのぼりフェスタ1000の芥川の桜堤公園

滝に出る。その対岸は戦国時代の三好長慶による**芥川山城址**がある。

このコースの延長区間となる摂津峡下流部は河川堤防上に清水緑道として歩道が整備されている。右岸の下流側には**あくびあ芥川**(芥川緑地資料館)があり、芥川や高槻市内の動植物生態系の常設展示がある。

中流部の大蔵司橋下流には、現在の南平台丘陵地から芥川沿いに、淀川堤防造成用の土砂を運搬したかつてのトロッコ軌道の橋脚跡が河道内に残る。

高槻市街地西側の芥川中流部の見所は、親水活動に整備された**芥川桜堤公園**である。右岸側のゆめ桜通りと左岸側の夢鯉ロードは市民の散策道である。4月末からの大型連休には、河川を横断して鯉のぼり1,000匹を泳がせるこいのぼりフェスタ1000が実施される。

中流域右岸側のもう1つの見所は、**史跡今城塚古墳**(340m×350mで二重濠の前方後円墳)で、学会の定説では真の継体天皇陵墓とされる。公園内にははにわ公園があり、「**古代体感ミュージアム今城古代歴史館**」では、古墳の展示物がある。

(海老瀬潜一)

8-4 淀川中流域

淀川中流域における河道の特徴は、ほぼ全区間が両側に高水敷を有する複断面河道となっていることである。水深は三川合流点付近では約1mと浅いが、下流部では**淀川大堰**の堰上げのため約4mと深い。現在では上流から、枚方大橋、淀川新橋、鳥飼仁和寺大橋、鳥飼大橋、豊里大橋、菅原城北大橋、赤川鉄橋など多くの橋が架けられているが、往時はほとんど橋がなく川を渡るには舟が必要で、明治から大正にかけては上流から、橋本一広瀬、樟葉一前島、磯島、枚方、出口一三島江、仁和寺一鳥飼、佐田一佐太、七番・八番一津屋、平太一平田、赤川、毛馬など20ヶ所前後の**渡し場**があった。

現在、高水敷の多くは**国営河川公園**となっており、5つのゴルフ場や多くのグラウンドがあって、自然な状態の残されているまとまった区間は少ない。

淀川左岸沿いでは京街道の枚方宿、守口宿が賑わったが、橋本や江口は遊女の里として知られた。特に橋本には往時の**遊郭跡**の建物が並んでいる。対岸の島本町には水無瀬離宮跡があり、良質な地下水が湧くことで知られる。高槻市鶴殿の広大な**ヨシ原**は日本を代表する歴史的景観とも言われ、水質浄化に寄与するほか雅楽の主旋律楽器であるヒチリキの日本唯一の**蘆舌産地**でもある。

枚方市内では、左岸から船橋川、穂谷



淀川中流域と国営淀川河川公園

川、**天野川**が合流する一方、大阪市と大阪広域水道企業団の取水場がある。枚方大橋の左岸上流には国土交通省淀川河川事務所や淀川資料館があり、淀川中下流部の管理の中核となっている。河川沿いの京街道には**枚方宿鍵屋資料館**があり、古文書や民具、発掘調査の出土品などが展示されている。近くの枚方パークは、かつて菊人形で知られた。

寝屋川市にある木屋揚水機場からは、農業用水が通年取水されている。守口市の庭窪付近には、守口市、大阪府、大阪市の浄水場が並んでいる。

対岸の高槻市内では**檜尾川**と芥川が合流し、その下流の摂津市では**神崎川**が分派する。江口橋で神崎川を渡って大阪市東淀川区に入ると、まもなく**江口の君堂**(寂光寺)がある。

淀川中流部にはかつて全区間にわたってワンドが多数存在したが、今では、樟葉、点野、庭窪にわずかに残っているほかは城北地区に限られている。**城北ワンド群**はかつてイタセンパラをはじめ淀川の水生生物の宝庫と言われたが、現在では大半を外来魚が占めている。

(澤井健二)

8-5 安威川・神崎川

安威川の起点は大阪府の北摂地域にあり、京都府亀岡市亀ヶ尾山付近や高槻市檜田地区を水源としている。京都府域の山間の農村地域を流れる東掛川、栢原川が高槻市域から流入する二料谷川(河川名としてはここから安威川とされている)と合流して始まる。

下音羽川、茨木川(佐保川、勝尾寺川)、山田川、大正川、正雀川を合流しながら高槻市、茨木市、摂津市、吹田市、大阪市を流下し、大阪市東淀川区の相川、吹田市高浜地先で神崎川に合流する。流域面積約163km²、河川延長約32kmの一級河川である。

上流域は特に自然環境が豊かな土地であり、**深山水路**、**大門寺**、**阿為神社**、郡山宿本陣、新屋坐天照御魂神社、磯良神社、総持寺など史跡も多い。茨木川は、度重なる洪水の被害のため、安威川との合流地点を付替えられ、廃川跡地は**元茨木川緑地**として整備されている。さらに北摂豪雨を契機に安威川ダムが建設中(2021年度末完成予定)である。

下流域は**番田水路**や**鳥飼三箇牧水路**などの農業排水路と並行して流れて神崎川に合流する。摂津市内には、味府神社や**味吉天満宮**などの由緒ある史跡もある。

神崎川は、奈良時代の末期に和気清麻呂によって淀川と瀬戸内海を直結する



安威川河川敷

ために開削された。神崎や江口などの港をはじめとする繁栄の名残が所々に見られる。

現在の神崎川は、洪水対策として明治になってオランダ人デ・レーケの指導により一津屋から西に直線的に吹田市御旅島まで開削され、安威川と合流している。

神崎川は、その後糸田川、高川、天竺川、猪名川と合流し、左門殿川、中島川、西島川に分流しながら、左岸側の大阪市東淀川区、淀川区、西淀川区、右岸側の吹田市、豊中市、尼崎市を流下し、大阪湾へと注ぎ込んでいく。流域面積は約627km²、河川延長約21kmの一級河川である。

両岸には、市街部、下水処理場、ごみ焼却場や各種工場群を多く見られるが、東洋初のビール醸造の契機となった**泉殿宮の霊泉**や**旧西尾家住宅**、高濱神社があり、下流には上田秋成ゆかりの**香具波志神社**、徳川家康との縁で江戸「佃島」の地名の由来となる田蓑神社内の佃漁民ゆかりの地の碑など意外な史跡も見られる。

(服部幸和・村岡浩爾)

8-6 猪名川

猪名川・藻川

猪名川は、兵庫県川辺郡猪名川町の大野山を水源地として、大阪兵庫の両府県を南下し途中、**藻川**に分流したのち再び合流して神崎川に合流するまで流路は43.2km、流入支川42本の一級河川である。猪名川の名称の由来は、大昔、川のほとりに住んでいた山直阿我奈賀という者が、その川を阿我奈川と名付け、それがなまって為奈川となったと言われている。

猪名川上流部には、右岸側支流の野尻川沿いに**猪名川町立多田銀銅山悠久の館**があり、青木間歩などの採掘跡や代官所跡などの史跡ある。左岸側には、山辺川、田尻川などの支川があり、**知明湖・一庫ダム**を介して猪名川に流れ込んでいる。この地区の**妙見山**(660m)には、関西随一の日蓮宗霊場能勢妙見山があり、黒川地区では里山の景観が見られる。

少し南下すると、清和源氏発祥の地**多田神社**があり、「三ツ矢サイダー」発祥の地**平野鉦泉跡**、銀橋の近くには西行法師の歌碑などがある。

猪名川中・下流部では、左岸側で余野川が合流し、**五月山**を背景に「ビッグハープ」の愛称で知られる斜長橋が見える。池田には呉服神社、伊居太神社がある。また、元禄時代に猪名川の伏流水を利用して発展した池田酒や伊丹酒の蔵



呉服橋から猪名川を見る

元が現在もあり、吉田酒造の主屋建築などもある。「池田の猪買い」の舞台にちなんだ上方落語ミュージアムや、松村呉春の作品を所蔵する逸翁美術館がある。

右岸側では、**最明寺川**が合流し、上流には北条時頼にゆかりのある最明寺滝、満願寺がある。JR川西池田駅の南には弥生時代の近畿地方を代表する大規模集落、加茂遺跡があり、鴨神社がある。

猪名川は、軍行橋のすぐ下流で**箕面川**が合流する。上流には、紅葉で有名な箕面の滝や箕面川ダムがある。やがて猪名川は二手に分かれ、西側は藻川となる。猪名川橋を渡って左岸の堤防を少し行くと弥生式時代の集落跡、田能遺跡、尼崎市立田能資料館がある。原田下水処理場を過ぎて**千里川**合流後、利倉橋へと続く。

藻川の右岸側、JR塚口駅の東側には、伊佐具神社、廣齋寺があり、近松門左衛門の墓や近松記念館がある。藻川は、再び猪名川と合流し、山陽新幹線と交差するあたりで**神崎川**に合流する。周辺には、神崎の津の繁栄の名残の遊女塚や神崎の金比羅さんの石灯籠がある。

(服部幸和・奥野年秀・高原信幸)

8-7 大川と大阪市内河川

本節では、琵琶湖・淀川水系の最下流である大川を中心とした大阪市内河川を採り上げた。

大阪市域は北側を神崎川、南側を大和川、東側を生駒山系から流れ出た諸河川、そして西側を大阪湾に囲まれている。その中で大阪市内の河川は、琵琶湖淀川水系の最下流に位置し、淀川水系、寝屋川水系を中心とした諸河川からなっている。それらの中で、洪水防止を目的に琵琶湖からの流れを一気に大阪湾まで流下させるために、**新淀川**が明治時代に新しく開削された。そして、旧来の流れは正式には「**旧淀川**」と称され、通称上流側から順に大川、**堂島川**、**安治川**と呼ばれている。

上流部では、まず淀川大堰・毛馬水門・毛馬閘門・**排水機場**がある。大阪には今日まで220もの洪水が襲っていて、ほぼ5年に1回である。これら毛馬排水機場など大阪市内のいろんな洪水津波高潮防止施設は、過去大阪を襲った幾多の台風、洪水、高潮等の再来には耐えられるように設計されたものである。

下流に向かって大川沿いには**毛馬桜之宮公園**が整備され、与謝蕪村公園、**造幣局**や**泉布観**など歴史的建造物や文化施設が点在している。

そして、大川は、**寝屋川**と合流しながら堂島川と土佐堀川に分かれて、中之島



天満橋から見た大川天神橋付近

に至る。さらに、直ぐに土佐堀川から**東横堀川**が分流する(詳しくは「8-7東横堀川・道頓堀川」参照)。そこには、大阪高等・地方裁判所、**大阪天満宮**、中央公会堂、大阪府立図書館、大阪市役所、日本銀行大阪支店など、大阪を代表する官民の中核施設や文化施設が並んでいる。また、近くには、緒方洪庵が開いた**適塾**など江戸時代から栄えた歴史文化施設も多数存在している。

さらに下ると、堂島川と土佐堀川が再び合流し、木津川が分流する所では、**大阪府津波・高潮ステーション**、**安治川水門**、河口域の渡し船などがある。一方、この付近は大阪府庁舎が明治時代に初めておかれて栄えたところであり、大阪市庁舎跡もある。その他、雑喉場魚市場跡碑など江戸時代の大阪の経済発展に伴って人々の営みの文化と歴史遺産が多く残されている。さらに、河口域では川幅が広くなり、船を通すために高所に架設された橋も多く、人々の生活道路として渡し船が今も残っている。そして、現在運航されている8ヶ所の渡し船は、通行料無料でちょっとした観光名所にもなっている。

(福永 勲)

8-8 東横堀川・道頓堀川

本節では、琵琶湖淀川水系の最下流に位置し、淀川水系、寝屋川水系を中心とした諸河川からなっている大阪市内河川の中で、もっとも繁華な街を流れて人々に親しまれている東横堀川・道頓堀川を紹介する(参照「8-6大川と大阪市内河川」)。東横堀川は、太閤秀吉が大阪城の外堀として開削したもので、長さは約3kmである。それに続く道頓堀川は、江戸時代船場等の商工業の発展のために安井道頓が開削したもので、長さ約2.5kmである。

東横堀川入り口付近には、古くから京都からの船の発着場となった**八軒家浜船着場跡**がある。その入り口から川沿いには、東横堀川緑地の石標、**東横堀川水門**、江戸時代の公儀橋12橋(重要で幕府が直轄管理する橋で、その他の多くの橋はすべて有力商人などが建設管理した)の一つの**高麗橋**、西日本各地への里程原標などがある。その他この付近には、大阪銀座跡、泊園書院跡、西町奉行所跡の碑、大阪活版所跡碑など、江戸時代から明治時代への歴史遺産がある。

さらに南の川沿いには、昔ながらの石造りの本町橋、大きい堀割であった長堀川の埋立跡である長堀通、**住友銅吹き所跡**がある。やがて上大和橋を過ぎると、西へ流向を変えて道頓堀川となる。この付近の文化施設としては、東方に高津宮、



ネオンがきらめく夜の道頓堀川

大阪城内に**金明水井戸**、南東に**生国魂神社**、南方に**四天王寺**などがある。

道頓堀川を少し下って公儀橋であった日本橋の北詰広場には、**安井道頓碑**がある。川の北側には宗右衛門町があり、南側には道頓堀界隈がある。この付近には河川水面から80cm程度の高さに木製歩道**とんぼりウォーク**が設けられ、人々がいっそう道頓堀川に親しみを感じるようになった。夜は赤い灯、青い灯のネオン輝く繁華街となっている。江戸時代船場が開発された当時は、船場の中は町衆の住む所であるのに対して、道頓堀川の南側には、芝居小屋や刑場が造られた。現在は演芸場や大阪芸人などに人気の高い**法善寺**、**法善寺横町**がある。

その他、千日前通には国立文楽劇場、なにわの台所黒門市場などが並んでいる。その下流には湊町リバープレイス、湊町船着場があり、また加賀藩や紀州藩の蔵屋敷跡碑や大阪相撲の前身勧進相撲興業地の碑なども建っている。

道頓堀川の終点、日吉橋直下には、回転式の**道頓堀川水門**があり、これを越えると、木津川に入る。

(福永 勲)

8-9 十三干潟

淀川の生態系については、中流域右岸の「鵜殿のヨシ原」や左岸の「城北ワンド群」は良く知られておりその再生活動や保全活動には多くの市民や研究者が関って取り組みが行われているが、淀川河口域（淀川大堰から下流）の生態系（干潟やその再生事業）については近隣の住民以外はあまりよく知られていない。

淀川河口の汽水域では、かつては180haの干潟が存在していたが、近年その面積は50haと大きく減少している。淀川河口の干潟は**西中島自然干潟**（通称十三干潟、河口からの距離約7.5km）と汽水域の低水路部に盛土を行い造成された**海老江人工干潟**（約4.5km）と高水敷部分の切り下げにより造成された**柴島人工干潟**（約9km）の3地点がある。

地下鉄御堂筋線の西中島南方駅南約300mの淀川の堤防にある、河川公園の先のヨシ原に沿って遊歩道が設置され、所々にヨシ原再生中の看板が立てられている。この一帯が通称十三干潟と呼ばれ西中島自然干潟である。**淀川大堰**下流の西中島・十三一帯に広がる塩性ヨシ原と干潟は約14haあり、淀川河口域では最大規模である。長さ1.5km余りで幅員約70mから80mの細長い地区である。

その一帯は、汽水域の特性である豊かな底生動物の生息地であり、ヨシ原にはウラギク、シオクグなどの汽水性の植物も



十三干潟

多い。干潟は豊富な底生生物を餌とする野鳥の生息地や渡りの中継地となっている。大都市の中心部に近くにあつて、このような自然が残されている十三干潟はきわめて貴重な空間である。満潮時には観察することができないが、干潮時には一面の干潟が観察できる。また、十三干潟一帯では近年蜆漁も復活し、鼈甲蜆として市場にも出回っているそうである。

淀川区では、2001年度後半から「川と寄り添うまちづくり」という視点で、区内の組織、個人が主体となり、行政機関や専門家も入った「淀川フォーラム実行委員会」を立ち上げた。自由でリベラルな精神で学習やイベントなどに取り組んでいる。

この中で、「淀川区生涯学習推進委員会」、「リバーマスター講座」、「河川敷フェスティバル」、「キッズリバースクール」の開催、「水防団体験（訓練）への中学生の参加」など多彩な活動が生まれた。

十三干潟は子供からシニアまで幅広い年齢層が体験学習をすることができる格好のフィールドである。しかし、河口の水辺特有の危険性を孕んでいる。安全対策と教育も必要である。

（土永恒彌）

あとがき

「琵琶湖・淀川 里の川をめぐる～ちよつと大人の散策ブック～」は、「源流を行く」4編、「おみの川」3編、「みやびな川」6編、「歴史とロマンの川」6編、「なにわの川・庶民の川」5編の計24編と本総集編で完結となる。

著者らにとって幼い頃や学生時代から馴染んできた「川」であつたり、仕事上関わったことのある親しみのある「川」も多い。あらためて川とその周辺を歩き、当時の水辺環境に比べて大きく変化した川もある。また、その裏には奈良、平安の昔から現代に至るまで人々の生活や文化と

川との深い関わりが感じられた。今後は、琵琶湖・淀川水系以外の関西の川についても探索の目を向けていきたい。

本書発行にあたり、お世話になった琵琶湖・淀川水質保全機構歴代事務局長西村安裕、辻英典、齋藤方正の各氏及び編集実務担当片山由香梨、小林芽久美、山口雅乃、伊賀貴子の各氏並びに関係者の皆様に深謝いたします。

最後に、本シリーズの完結を待たずにご逝去された川部会初代部長村岡浩爾先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（服部幸和）

執筆者

海老瀬潜一

元摂南大学理工学部

大久保卓也

滋賀県立大学/元滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

奥野年秀

元兵庫県立公害研究所

勝矢淳雄

賀茂文化研究会・京都産業大学名誉教授

國松孝男

滋賀県立大学名誉教授/元立命館大学

古武家善成

神戸学院大学/元兵庫県立健康環境科学研究センター

駒井幸雄

大阪工業大学/元兵庫県立健康環境科学研究センター

齋藤方正

（公財）琵琶湖・淀川水質保全機構/元大阪広域水道企業団

澤井健二

水辺に学ぶネットワーク・摂南大学名誉教授

高原信幸

元神戸市環境保健研究所

田口 寛

日本メンテナンスエンジニアリング株式会社

土永恒彌

元大阪市立環境科学研究所

服部幸和

大阪教育大学/元大阪府環境農林水産総合研究所

福永 勲

元大阪人間科学大学/元大阪市立環境科学研究所

村岡浩爾

大阪大学名誉教授

山本 攻

（株）エックス都市研究所/元大阪市立環境科学研究所

和田安彦

関西大学名誉教授